

地域交流研究

2013年度

年報 第10号

目 次

第 10 回地域交流研究フォーラム

『センターの歩んだ 10 年と新たな挑戦
(図工・美術教育からの提案)』

2 月 22 日に開催予定でしたが、大雪のため中止となりました

2013 (平成 25) 年度活動報告

I. 2013 年度の活動について〔概況〕	7
II. 各部門の活動	10
II-1. フィールド・ミュージアム部門	
II-2. 発達援助部門	
II-2-1. SAT 事業	
II-2-2. 地域教育相談室	
II-2-3. 地域情報教育	
II-2-4. 地域美術教育	
III. インターフェイスとメディアの活動	38
III-1. 各種講座の開催	
(1) 都留文科大学現職教員教育講座	
(2) 都留文科大学子ども公開講座	
(3) 県民コミュニティーカレッジ講座	
(4) 都留文科大学市民公開講座	
III-2. 『地域交流センター通信』の発行〔概況と第 24・25 号〕	
III-3. 学部共通科目の開講	
(1) 「地域交流研究Ⅱ」－生きもの地図を作る－	
(2) 「地域交流研究Ⅲ」－「山梨」を知り、歩き、知らせる－	
(3) 「地域交流研究Ⅳ」－地域の交流誌をつくる－	
IV. 地域貢献活動	52
IV-1. 山梨県地域教育フォーラム南都留集会	
IV-2. 都留市放課後子ども教室事業	
IV-3. 文大ボランティアひろば	
IV-4. まちづくり交流センター	
IV-5. 文大名画座	
IV-6. 学級づくりの向上をめざす実践講座	
V. 地域交流研究教育プロジェクト	64
V-1. 田んぼクラブ－稲作体験実習の取り組み－	
V-2. 食育つる推進市民会議活動－市民会議と大学の連携による 学生主体の食育実践活動の試み－	
V-3. 「谷二ラボ」活動について	

第10回 地域交流研究フォーラム

『センターの歩んだ10年と新たな挑戦
(図工・美術教育からの提案)』

2014年2月2日
都留文科大学



本部棟までの広場



自然科学棟前の道

2014年2月22日に開催を企画しておりましたが、
大雪のため中止となりました。



正面入口から1号館への道



学生・教職員有志による雪かき

第10回地域交流研究フォーラム

センターの歩んだ10年と

新たな挑戦(図工・美術教育からの提案)

2014年2月22日(土) 午前10時～午後1時

会場: 都留文科大学2102教室(2号館1階)

主催: 都留文科大学 地域交流研究センター



■午前10時～11時

歴代センター長と語る10年の歩みから将来を探る

(森博俊、西本勝美、杉本光司)

■午前11時～午後1時

図工・美術教育からの提案『たからばこ作戦』

発表者: 鳥原正敏、杉本光司、竹下勝雄、舘山拓人、大輪知穂

助言者: 小松佳代子(東京藝術大学 准教授)

研究協力者: 渡辺雅彦(都留市立旭小学校教諭)

上田由紀子(西宮市造形教室「こどもアトリエ」主宰者)

問い合わせ: 地域交流研究センター

電話: 0554-43-4341(内線441) FAX: 0554-43-4347

e-mail: ckouryu@tsuru.ac.jp

10

10

センターの歩んだ10年と

新たな挑戦(図工・美術教育からの提案)

都留文科大学における地域交流推進の礎として「地域交流研究センター」が設立されてから10年という時間が流れました。センターにおける年間最大行事でありますフォーラムも今回は第10回という節目の年を迎えました。

そこで、歴代センター長をはじめ関係者が一堂に会することにより、これまで歩んだ10年の振り返りと検証の中から、これからのセンター運営に対する方向性を見いだす機会として今回のフォーラムを開催いたします。

また、センターにおける三つの部門活動「フィールド・ミュージアム」「発達援助」「暮らしと仕事」の一つであります「発達援助部門」における新しい活動として昨年度から始まった図工・美術教育と情報教育の連携による取組みから、『たからばこ作戦』と名付けた新たな研究活動について、ここに関わる人々による活動の概要、これまでの成果そして今後の計画について発表させていただきます。

どうぞ地域交流研究センターにおける活動に対してご関心をお持ちの方々をはじめ、図工・美術教育にご興味をお持ちの皆様のご参加をお待ちしております。

プログラム

総合司会：坂田有紀子（初等教育学科教授）

10：00 開会

歴代センター長と語る10年の歩みから将来を探る

森 博俊（初等教育学科教授）

西本勝美（初等教育学科教授）

杉本光司（情報センター教授）

11：00 図工・美術教育からの提案『たからばこ作戦』

司会：鳥原正敏、 助言者：小松佳代子（東京藝術大学准教授）

☆研究協力者の紹介

☆発表

・『たからばこ作戦』について：鳥原正敏（初等教育学科教授）

・研究成果の報告：舘山拓人（初等教育学科特任准教授）

・システム『たからばこ』について：杉本光司（情報センター教授）

・システム『たからばこ』の課題：大輪知穂（情報センター職員）

・海外との交流について：竹下勝雄（初等教育学科教授）

☆意見交流

13：00 閉会

活 動 報 告

2013 年度

活 動 報 告

2013 (H25 年度)

I. 2013 年度の活動について〔概況〕

地域交流研究センターの創設から 10 年という時が流れ、当初から継続されてきたそれぞれの部門活動においても、新たな取り組みやメンバーも加わり、その節目として、これまでの 10 年を振り返り、新しい 10 年に向かうという意志を確認すべき場として第 10 回フォーラムを 2014 年 2 月 22 日（土）に開催することを企画したものの、2 月 14 日（金）から降り始めた未曾有の大雪被害の影響で中止を決断したことが非常に印象に残る年であった。

昨年度（平成 24 年度）は、文部科学省による、新規事業「地（知）の拠点整備事業」（COC：Center Of Community）計画が発表され、これまで地域交流研究センターにおいて実践してきた多彩な取り組みや活動実績は、地域をフィールドとした研究活動をとおして得た成果を教育に活かし、そして地域に還元するという目標を掲げて活動を続けており、今回の COC 事業の趣旨とは、まさに本センター活動における趣旨そのものであるということで、その申請には地域交流研究センターが大きく関わることとなった。その結果は、第 1 次の書類審査は通過したものの、残念ながら最終採択には至らなかった。これまでも、2007 年度に採択された「特色 GP」「現代 GP」の 2 件の実践は、その後のセンターにおける部門活動の柱として、変わらず進化を続けており、改めて、大学全体の中における地域交流・地域貢献に対する研究教育活動の重要性を認識する非常に貴重な経験となった。

本センターにおける各部門活動に目を向けてみると、フィールド・ミュージアム部門では、昨年度に開催した「地域交流研究フォーラム」において、『フィールド・ノート 10 周年からみえる未来』と題して、発刊 10 周年、75 号を数える「フィールド・ノート」の足跡について、これまで発刊に関わった人、支え続けて頂いた方々が集い、語り合う場として開催して以来、改めて、フィールド・ノート発行の重要性が認識され、学内外からの評価も非常に高まった。また、オープン・アーカイブ事業においても「ミュージアム都留」との連携も定着し、昨年度末の平成 26 年 3 月 22 日から 5 月 6 日の期間、ミュージアム都留において、「写真が伝える都留の思い出 ―未来へ贈る地域の記憶―」と題した企画展を開催することが出来たことは大きな第一歩である。

発達援助部門でも、SAT 事業におけるこれまでの活動の実績により、平成 22 年度入学生が 4 年生となる今年度から開講された、新たな必修教職科目「教職実践演習」のカリキュラムの主軸として運用されたことに伴い、引き続き、大学や教育委員会からの支援を受け、新たな展開に向けて活動している。しかし、これまでの科目「学校参加」との関係性や運営方法においては課題が提示されている。地域教育相談室においても、継続的に教育委員会主催の研修会や校内研の講師としてスタッフを派遣してきた結果、その研修会の参加者の情報

によって相談室の活動が伝わり、その存在や役割がさらに認知されてきている。地域情報教育においては、これまでの小中学校ホームページの運用支援を教育委員会に引き継いだことにより、この部分での支援は中止とし、新たな形での支援を検討している。そして、2011年度から参加した地域美術教育分野の活動においても、引き続き、小中学校の図工・美術担当教員との研究会や研修会を開催した。また、青年会議所との連携による「つるの宝カルタ」製作活動においては、ゼミ学生とともに積極的に絵札となる原画作成に取り組んだ。また、図工・美術教室と情報センターとの連携による、デジタルデータベースを使った図画工作の新たな取り組み「たからばこ作戦」プロジェクトにも大きな期待を寄せられている。

暮らしと仕事部門では、昨年度末で退職された田中夏子先生と泉桂子先生がこれまで担当されて部門活動を維持してきたということもあり、部門そのものも無くすのではなく、引き継ぎのできる担当者を待つという形で維持することにした。

地域交流センター通信も、畑編集長を中心に精力的な取材活動を行い、24・25号を発行した。特集として、24号においては、1.「大学と地域をミュージアムとして市民と共有する」、2.「地域・故郷を思う」－東日本大震災と私たち－（その5）、3.「出会いを生み喜びを引き出す公開講座」を。また、25号においては、1.「動き始めた『都留市まちづくり交流センター』」、2.「9年目を迎えた地域交流研究センターの講義科目『地域交流研究』」3.「南都留地域教育フォーラムと美術教室」と題し、非常に丁寧な取材を行い、その思いを的確な言葉で表現し、読む者それぞれの心に強く語りかけてくれたことに対し、多くの読者から力強い励ましが寄せられており、関係者に大きな力を与えてくれた。

地域貢献活動においても、これまでの恒例的な取り組みに対する参加・支援は継続され、新たに連携する組織や機関も増えている。これまでの着実な取り組みや粘り強い働きかけが実り、本センターが、各部門の活動を組織的にサポートし、継続的に動機付けていく機能を持つことの意義を改めて確認したい。特に、教育委員会の「放課後子ども教室」プログラムとの連携による新たな「子ども公開講座」の開設は、他の地域にはない都留独自のスタイルとして、担当教員の協力を頂き、センターが大きく貢献している取り組みとして注目されている。

また、これまでも、センターにおける活動が拡充するにつれ、スタッフ・体制の拡充を求めてきたが、センター事務局全体の業務運営担当者としては、前年度から担当していた職員の本田氏が、新規開設となった「都留市まちづくり交流センター」のサテライトに派遣され、新たにセンター事務局職員として小林氏が担当し、学生課補佐と2人の担当者の努力と連携により、センター運営業務に対しても、スムーズな対応が行われたことに感謝している。しかし、望まれるセンターとしての体制づくりには、まだまだ遠い道のりである。また、センターそのものの活動スペースの確保についても、コミュニケーションホールにおける騒音に対する防護策もないまま、移転も含めた将来的なセンター再編構想に向けて、昨年度の教育研究審議会に対しても提案し了解されたものの、未だ実現できておらず、引き続き粘り強い交渉が求められる。

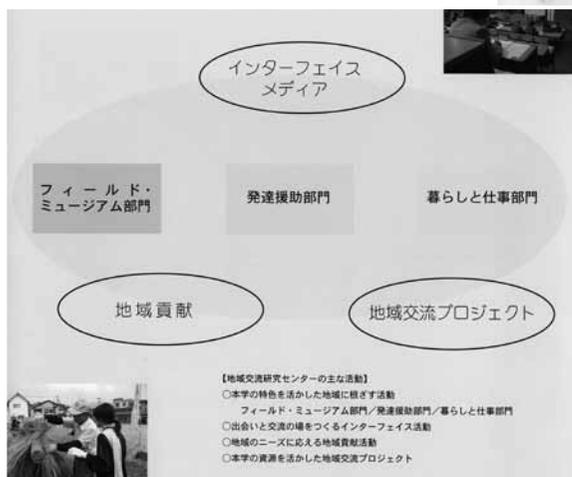
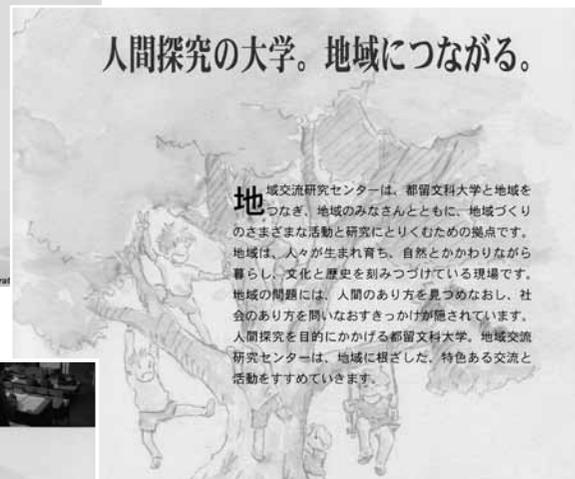
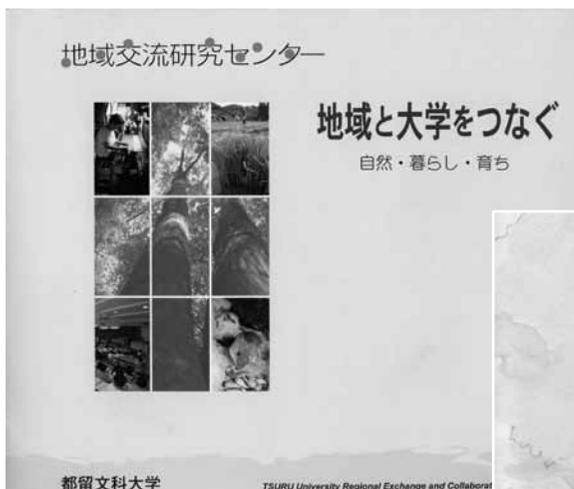
最後に、大学全体の中での、「地域交流研究センター」の位置づけである。特に、最近は、若手教員による、センターへの地域交流研究教育プロジェクトに対する取り組みを通じた参加はあるものの、日常的なセンター活動に関わる教員は、まだまだ一部であると強く感じる。

特に、「暮らしと仕事部門」における担当教員不在という現状に対しては、今後の部門活動の継続も含めた将来構想における検討が重要と考える。また、学生に対する認知度も非常に低く、「フィールド・ミュージアム」や「SAT」といった個々の活動は知っていてもセンターそのものの存在を知らない学生が多いようである。今後は、学内の他分野の教員に対しても参加を促してだけでなく、学内掲示を中心に学生に対する広報活動の必要もあるだろう。更に、本年度から旧都留市文化会館にオープンした「都留市まちづくり交流センター」内への、本センターのサテライト設置を機に、市民に対するより一層の広報活動にも工夫が必要である。今や、地域交流研究センターの活動状況、役割、そして外部からの大いなる期待を考えると、現センターの場所からの移転は喫緊の課題として取り組む必要を痛感する。

改めて、地域との交流は、幅広く、奥深く、そして、多くの可能性があると感じている。

(文責・杉本光司〔地域交流研究センター長〕)

平成 19 年に作成したセンターパンフレット



Ⅱ .各部門の活動

Ⅱ－ 1. フィールド・ミュージアム部門

目次

はじめに

- 1 生きものに親しむキャンパスづくり
 - 2 研究・教育活動
 - 3 地域の現代的な課題に取り組む事業
 - 4 地域を調べ、記録し、学び合う事業
 - 5 地域の自然や生活の記憶を収集し、保存し、活用する事業
 - 6 展示・出版活動
- まとめ

はじめに

2013年度は、当初計画した事業をほぼ予定通り終えることができた。特に学内外にフィールド・ミュージアムの存在と活動を知ってもらうという長年の懸案も、フィールド・ミュージアム部門（以下、部門と記す）内で議論を重ねてパンフレットにまとめることができた。そこには、部門の活動の理念として、地域で生きものや人びととの出会いを楽しみ、観察し、ものごとからじかに学ぶことを大切にする、そして自然との関わりや、私たちの暮らし、文化のありようなどについて教職員・学生・市民とともに探究していく、と私たち部門の活動の理念を記した。自然の探究だけでなく、自然と人間との共生をも視野に入れた、本学の「人間探求」の理念とも大きく重なっている。

パンフレットの発行だけでなく、「キャンパスにリスを呼ぶ会」の活動においても、会員を募るなど（2014年3月末時点で、入会者数67名）、部門の取り組みへの共感の輪が徐々に広がりつつある。現代GP（平成19年度 文部科学省「現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム」、以下現代GPと記す）で設置した「ムササビライブカメラ」も、ムササビの育児用巣箱やカメラの修理と巣箱の改良を試み、本学ホームページで継続的に公開できるようになった。このホームページでも、キャンパスの自然を紹介しながら、部門の活動を紹介するように作り直し、多くの人が閲覧、関心を持つようになってきている。

部門では、地域交流研究センター（以下、センターと記す）発足以前のいわば前史の諸実践のなかで構想されてきたフィールド・ミュージアムの理念をさらに深め、練り直し、時間をかけて事業を展開してきた。センター発足からしばらくは、大学を中心として広く市民や学生の参加を得ながら、また本学の自然環境や教育・研究の伝統を活かしてどのような事業を展開していくか試行錯誤をしてきたが、現在は、部門として取り組むべき事業が明確になってきたといえる。

2013年度の事業の特徴を整理すると次のようになる。 1）環境ESDプログラムと連携し

た自然観察会や『フィールド・ノート』の編集など、学生・市民参加の受け皿となる事業が充実してきた。2) 地域の動植物の保全活動や動物生態の研究などが各事業の基礎となり、自然観察会のプログラムなどに反映されている。3) 時間をかけて築いてきた地域の人びととの人間関係が、写真資料の提供やフィールドの使用など各事業に取り組むうえで大きな支えになっている。4) 市立図書館やミュージアム都留など、既存の施設と連携した事業を進めることで、新たな交流と人間関係ができつつある。5) 地域交流研究Ⅱ・Ⅳなど部門の理念を反映した授業や自然観察会、『フィールド・ノート』の編集作業など、教育的効果が高く、本学らしい取り組みが充実してきた。6) オープンアーカイブで収集した写真資料やデータベースを活用したミュージアム都留との連携事業が始まるなど、従来から継続してきた事業がほかの企画や新しい連携事業を生みだし、部門の活動に広がりともたらしめている。

以下に、2013年度の部門の活動を、1. 生きものに親しむキャンパスづくり、2. 研究・教育活動、3. 地域の現代的な課題に取り組む事業、4. 地域を調べ、記録し、学び合う事業、5. 地域の自然や生活の記憶を収集し、保存し、活用する事業、6. 展示・出版活動として整理し、それぞれの項目にしたがって、今年度の活動をまとめる。これら6つの項目は、部門の取り組みの柱であると同時に、理念を具体化したものである。そして最後にまとめとしてこれからの課題と展望を記したい。

1. 生きものに親しむキャンパスづくり

私たちは、まず足元のキャンパスを自然に親しむ入り口と位置づけている。身近な自然に親しみ、観察することは、人びとと出会い地域の魅力を発見する目を育むうえでも重要な経験となる。またここでの経験を多くの人と共有することで、部門の活動への共感の輪が広がってゆく。

附属図書館ビオトープは、附属図書館に隣接した工場跡地に設計されたもので、誰もが親しめるチョウや鳥、トンボなどが訪れ、大学を挟むように位置する山を生きものたちが行き来できる回廊にしようという考えのもと、開設当時から部門がこの手入れを行なっている。学生は6名が参加し、毎週1回、年間を通して剪定や草刈り、吸蜜植物の移植などに取り組んだ。さらには、キャンパスの植生がどのように変化したかを調査し、結果とその要因の考察を本学の研究紀要にまとめ、発表した（「都留文科大学附属図書館ビオトープの植生とその機能の評価」、都留文科大学研究紀要第79集、2014年、都留文科大学）。このビオトープ作業に参加した学生の一人は、「ビオトープはいままでも変化してきた場所で、これからも季節ごとに、その年ごとに変化し続けていくのでしょう。出会え



附属図書館ビオトープでの作業の様子。学生たちが週1回の割合で継続的な手入れをしてきた。

る生きもの、体験できる感動や心躍る発見も少しずつ変わり続けていくのだろうと思います。そう思うと、ただ通りすぎるだけの場所というのではなく、小さな出会いを積み重ねられる場所として通いたくなります」と感想を記している。

1号館に隣接する林「つるりん」では、毎年、初等教育学科専門科目「生物学実験Ⅰ・Ⅱ」および「演習Ⅰ(生物)」の授業内で、生物相の調査を行なっている。この調査を通じて、学生たちは今まで見向きもしなかった一つ一つの生きものたちと向き合い、それぞれの存在や特徴を知る。林の中の個々の生きものたちを認識し、生きもの同士の関係性(＝ストーリー)が見えてくるようになると、そこは単なる校舎の裏の林ではなく、『お隣さん(生きもの)の住む空間』へと学生の認識が変わる。このような生きものとの“ストーリーのある”出会いを積み重ねていくことは、人が自然と共に生きていく上でとても大切である。地域は人を含むさまざまな生きものたちの生活の場所である。山も川も畑も水も空気も土も、全ての資源は人だけのものではない。そんな単純なことを、この小さな林「つるりん」は学生たちに実感させてくれるのである。今後も毎年この林を舞台に小さな実践を積み重ねていきたい。



つるりに咲いていたシュンラン。昔は山にたくさん生えていたが、最近は見かけなくなった植物の一つ。少し暗めの安定した林床環境がシュンランの生育に適していたのだろう。

本学は、二つの山裾に挟まれるようにして立地している。その山裾からリスをキャンパスに呼び込み、みんなで出会いを楽しもうとするのが「キャンパスにリスを呼ぶ会」の活動である。



「キャンパスにリスを呼ぶ会」の活動。
リスを観察するための餌台を設置した。

この活動は、自然状態下でのリスの生態の解明など学術的な意味をもつ。また今日、大きなテーマとなっている自然との「共生」を実践的に考える契機にもなる。このようなささやかな実践は、ビオトープづくりと併せて広く自然に関心を向けるきっかけになると思われる。2013年10月16日にリスの食物となるクルミ拾いを十日市場の熊太郎神社で実施した。2014年1月24日には自然科学棟と美術棟の間にある林にリスの導線となる橋を設置した。

「ムササビライブカメラ構想」は、現代GPでネットワークカメラなどを購入し、ホームページ上でムササビの巣箱内の生態が公開できるようになった。この構想は、未だ不明な部分の多いムササビの生態を、多くの人と観察しながら解き明かし、キャンパスに暮らすムササビとその生息環境を見守り育てていこう、という目的で始まった構想である。しかし、巣箱内の湿度が高いなどの問題もあり、カメラのメンテナンスが不可欠であった。さらに落雷による機材の故障で配信が一時、中断していた。2013年度は、新たに巣箱を改良し、カメラの防水効果を高め、11月28日に巣箱を設置した。あわせてムササビの映像だけでなく広くキャ

ンパスの自然に関心を持っていただくために、本学ムササビライブカメラのホームページの改良を試みた。この事業は、本学の情報センターとセンター事務職員の協力を得て実施することができた。

2. 研究・教育活動

部門では、環境ESDプログラムの実習受け入れ先として、自然観察会を年4回開催している。2013年度は12人の実習生を受け入れた。6月、7月、10月、11月の4回、観察会を行なう予定だったが、10月の観察会は台風接近のため、安全性を考慮して中止した。部門の教員の指導の下、実習生は自然観察会の学生スタッフとして、下見、企画、教材研究、準備、当日の運営と解説の全てを行なった。最初はぎこちなかった学生たちも、回を重ねる毎に、自然を観る視点を身につけ、参加者に楽しんでもらえるようにとさまざまな教材を考案し、観察会当日には自信を持って楽しみながら解説を行なっていた。観察会には毎回20人程度の子どもたちや市民が参加したが、学生や教員が一方的に解説するのではなく、参加者に地域の文化や昔の遊びについて教えられる場面もあり、双方向的な温かい交流ができていたように思う。参加者からは学生たちの素朴で温かい解説が好評だった。たった4回の観察会であったが（観察会の実施は3回だったが、準備は4回分行った）、その準備の過程と、当日の参加者との交流を通して、学生たちは大きく成長したように思う。



環境ESDプログラムと連携した自然観察会。学生が市民や子どもたちからも学ぶ交流の場ともなっている。

地域の小学校と連携した総合学習も実施した。このような取り組みは、保全活動や生態学などの基礎研究が土台となっている。部門では、その前史も含め、ムササビやリス、野ネズミやモグラ類など身近な哺乳類の生態学的研究やそれをもとにした観察手法の工夫をしてきた。こうした成果を活かして、本学のキャンパスでも、ムササビやリスと出会う場所づくり、野ネズミやモグラ類と出会う装置を設置してきた（それぞれの動物の頭文字をとって「ムリネモの森作り」と私たちは呼んでいる）。こうした部門の成果や考え方を子どもたちと授業を通して共有しようと、今年度も都留市立都留文科大学附属小学校で4年生（4名）を対象に総合学習を行なった。子どもたちは、校舎に隣接する森にムササビの巣箱やリスの餌台、野ネズミやモグラの観察装置を設置し、見回りや観察を通して身近な自然に触れながら学習を深めていった。5月28日は附属小学校裏山の探検、6月27日は木材やガラスを使用してヒミズの観察装置を改善、7月12日は裏山の木材を利用したリスの橋づくり、9月26日はリスの食物となるクルミ拾い、10月24日は裏山でリスの観察、11月26日はムササビの巣箱づくりと巣箱かけ、12月7日は4年生の親子でムササビ観察会を実施した。子どもた

ちからは、「うらやまを歩いて足跡とかいるんなものを探したのが楽しかった」とか、「クルミを拾ったのがたのしかった」、「リスを見たのがたのしかった」といった感想が寄せられた。この総合学習で子どもたちは、授業の時だけ作業や観察をするのではなく、休み時間などを利用した餌やりや見回りを自発的に行なうようになった。じっさいに生きた動物に出会うことは、子どもたちにとってもかけがえのない経験になるようである。この総合学習の授業は、2014 年度も継続して行なう。



都留市立附属小学校での親子ムササビ観察会。ムササビの観察の前に、学生によるムササビについての解説を行なった。

3. 地域の現代的な課題に取り組む事業

初等教育学科生物ゼミでは都留市に生息するカワラナデシコやカジカの保全のための研究を行なっている。カワラナデシコもカジカも昔は地域の河川にたくさんいたが、近年数を減らしている身近な生きものの一つである。これら地域の生きものの保全のためには、まずその生きものの生態を知る必要がある。すなわち、分布や個体数、繁殖状況、生長や生存を律速する環境要因等を調べ、その生きものを取りまく環境の現状と個体数回復のための手法を考えることが大切である。過去5年間、市内で最大のカワラナデシコ自生地である鹿留川と、カジカが安定的に生息する戸沢川において、両種の研究を行ない、分布や個体数、繁殖状況、生長や生存に影響する環境条件等が明らかになった。2013年度は、市内の他の地域での生息状況を調べるために、城山や菅野川流域、大学周辺にてカワラナデシコの生態調査を、朝日川と十日市場においてカジカの生態調査を行なった。その結果、朝日川ではカジカの分布域は上流のごく狭い地域に限定されており個体数も少ないことがわかった。十日市場ではカ



城山のカワラナデシコ

ジカの平均サイズは小さいが個体数が多いことがわかった。カジカの個体数や分布に影響を与えている要因として水温が大きく関係していることが、朝日川と十日市場でも示された。カワラナデシコに関しては、城山のカワラナデシコは、個体数が約50個体と少なく、訪花昆虫も飛翔力の弱いコバチ類であるため、遺伝的に隔離された小集団である可能性が示唆された。都留市内の他の自生地も互いに距離の離れた小集団であり、他集団と



種子から育てた鹿留川産のカワラナデシコを鹿留川に植え戻す活動



学生たちによる戸沢川での調査

の遺伝的交流がなされているとは考えにくい。今後は早急に各集団内・集団間の遺伝的多様性を明らかにし、保全のために必要な措置を講じていく必要があるだろう。また、市民や子どもたちにカワラナデシコやカジカについて知ってもらい、カジカやカワラナデシコの保全活動を通して地域の生きもの保全について考えてもらうための取り組みも今後進めていきたい。

4. 地域を調べ、記録し、学び合う事業

全国から集う学生の目には、地域はそれぞれ異なった魅力をもつ。ある学生は、湧き水のあるまちに魅力を見だし、またある学生は大学周辺の自然豊かな森に興味を抱く。それらのほとんどが地域の人びとにとっては当然のことかもしれないが、あらためて学生の目で地域を見つめ直すと、地域にはさまざまな有形・無形の財産が豊かに存在していることに私たちは気づく。部門の機関誌『フィールド・ノート』では、本学の学生が自主的に参加し、地域での自然の様子や人びとに聞き取りした記録などを編集し発行する事業に携わっている。この事業も学生参加の受け皿として機能していると同時に、経験を広く市民や学生と共有したり、市民との交流を新たに生み出したりする機能も果たすようになってきている。教育的な効果も高く、経験を書き記す作業を繰り返し、多くの読者からの励ましを受けながら学生は成長していく。2013年度は、77号から80号を予定通り発行した。年4回、48ページ、各号500部発行した。県内外の読者も多く、現在、140名に発送している。



学生が主体となって編集・出版する『フィールド・ノート』の編集の様子

地域の研究会と連携した取り組みも行なっている。郷土研究会と2年をかけた富士道を歩くという企画も、2013年度に無事に終了した。大月から、富士吉田までじっさいに歩き、周辺の史跡や自然を記録した。毎月1回（2014年2月、3月は豪雪のため延期した）のペースで開催し、学生と市民との交流の場ともなった。以前から部門では、都留市周辺だけではなく富士急沿線もフィールド・ミュージアムにしようという構想があり、今回の郷土研究会との事業は沿線の様子を歩いて知る契機となった。この成果は、冊子としてまとめ、2014年度に発行する予定である。

5. 地域の自然や生活の記憶を収集し、保存し、活用する事業

地域の今だけではなく、過去の資料も収集し保存する取り組みは、現代GPの「オープンアーカイブ」事業から始まった。オープンアーカイブ事業は、「地域の資料や記憶の保管庫」としての機能をもち、地域のあり方や課題などを検討するうえで幅広く活用していこう、というものである。この事業では、これまで約4000枚の写真をデータベース化した『奥隆行写真コレクション』をもとに、地域の小学校での授業や本学の授業、展示活動で活用してきた。



家族の写真が中心の『益子亮写真集』

2013年度は、新たに『益子亮(ましこりょう)写真集』をオープンアーカイブに加え、発行した。『奥隆行写真コレクション』には、地域の行事や祭り、文化など幅広いテーマの写真が収められているが、この『益子亮写真集』には、家族の日常が収められている。家族をテーマとした写真はプライベートなものだけに収集が難しい。その点からもこの写真集のデータベース化の意義は大きいだろう。さらに、ミュージアム都留を窓口として市民から多くの写真を集め、デジタル化していく作業にも取りかかり、2013年度末で約800枚の写真を新たに集めることができた。これはそれぞれの独自の人のつながりを活かした取り組みであり、本学のオープンアーカイブ事業をさらに発展させる役割を果たしている。

6. 展示・出版活動

部門の活動や理念を多くの人と共有し、共感の輪を広げるうえで重要な役割を果たすのが、展示・出版活動である。まず、展示活動に関しては、現時点で本学には部門の展示施設や展示空間がない。部門の活動の舞台である展示空間は、あくまで野外であるが、最小限度の展示スペースは来訪者への対応などには必要であり、今後の課題でもある。現在では、部門の展示活動は、富士急行線の都留文科大学前駅の駅舎、市立図書館、で行なっている。展示替えは、1ヶ月に1回の割合で、大学周辺の自然や人びとの暮らしをテーマに部門の活動の成果を交えながら展示をしている。この展示は、学生が製作し、成果を発表する場ともなっ

いる。また、都留文科大学前駅の駅舎では、地域交流研究Ⅱや博物館実習などの授業とも連携した展示が、さまざまな人びとと地域の魅力や学生の学びの成果を共有する重要な役割を果たしている。本学の華道サークルもこの駅舎で展示活動をしており、華やいだ雰囲気をつくりだしている。

オープンアーカイブの事業を活用して、2013年度はミュージアム都留との連携事業を試みた。都留の過去と今を比較しながら、ミュージアム都留が所蔵する資料とあわせて公開展示する、というもので約2年の準備期間をかけた。パネルの総数は約160枚である。開催期間は2014年3月22日から5月6日で、「写真が伝える都留の思い出—未来へ贈る地域の記憶—」と題して開催した。開催期間中に800名を超える市民が来館した。部門で地道に写真を収集してきたことが一因となり、今回のこのような連携と企画展が実現できたと考える。今後も私たちの理念に沿った活用の方法や連携を模索していきたい。



ミュージアム都留と連携して開催した企画展。開催期間中に800人を超える来館者があり、新たな写真の提供も増えた

このような部門の成果を目に見える形で共有できる媒体として冊子やパンフレットは大きな意味をもつ。部門では、先述した『フィールド・ノート』のほかに、オープンアーカイブの図録として『益子亮写真集』を発行した。さらに、分かりやすく部門の考え方や活動内容や部門の歴史、参加の方法などを記したパンフレットを作成し、発行した。このパンフレットは、2種類（A4二つ折、B4二つ折）作り、A4版二つ折は、新生入生用に配布した。また、B4版二つ折は教職員・学生や市民配布用として活用していく予定である。

フィールド・ミュージアムの活動を幅広く知っていただくため、活動の理念や内容をわかりやすくまとめたパンフレットを作成した



まとめ

センターの一部門として位置づけられて10年が経過した。はじめに記したように、発足当時は本学を中心にどのような事業を進めていけばよいか、その内容も方法も手探りの状態であった。しかし、実践を通してフィールド・ミュージアムの考え方を部門で議論するなかで、本学の教育の伝統や自然にかこまれた環境などを活かした本学らしい事業が展開できる

ようになってきた。地域の人とのつながりもこうした事業のなかで築かれており、部門の大きな財産となっている。さらにさまざまな分野で活用可能な写真資料なども数多く蓄積され、地域の博物館や図書館と連携した展示事業も新たにできるようになった。フィールド・ミュージアムの理念を共有するだけでなく、さらに考え方を深化させ、発展させるためにも、今後も部門のなかでの議論を重ねながら、丁寧に事業を進めていきたいと考えている。

現代は自然との共存が大きなテーマとなっているが、この問題一つをとってみても、狭い専門領域のみでは解決が難しく、領域を越えた取り組みが欠かせない時代となっている。本学のフィールド・ミュージアムは、決して自然のみを探究するのではなく、幅広く自然と人との暮らしを通して人間の文化的営みのありようを探ろうとしている。それは「人間探求」を掲げる本学の理念とも大きく重なりあう。今、全国で学内に博物館を開設する大学が増えている。しかし「もの」と「こと」との関係性を断ち切ることなく本物から学ぼうとする理念を掲げたフィールド・ミュージアムは本学だけである。私たちは、今後も、本学の教育・研究、自然環境の特徴を活かし、自然と共存する新しい文化のありようを多くの人びとと探っていきたい。そしてあらたな教育や研究の芽を育てていきたいと考えている。

最後に課題を整理したい。一つは、体制の問題である。現在まで、兼任教員の持ち味を活かした事業を行ってきたが、それぞれの教員の負担も大きい。専任教員とともに観察会の指導やオープンアーカイブの維持・管理・運営を担当できる専門職員がいると兼任教員の負担も軽減でき、さらに一つ一つの事業を丁寧に行なうことができる。二つ目は、施設問題である。現在は、コミュニケーションホールの半地下で『フィールド・ノート』の編集作業や、部門の会議、事務職員の仕事をこなしている。地域で集めた資料や標本の保管はほかの教室を借りている状態である。部門の活動に参加する学生や市民との交流スペースや、最小限の展示スペースなどは必要であろう。これらはセンター全体の将来構想とも関わることであり、今後、センターとして十分に議論をしていくことが不可欠である。なお、2013年度の部門の事業は、観察会の事前準備や広報などセンター事務局の職員の協力なしには推進できなかったことを記しておきたい。

(文責・北垣憲仁、坂田有紀子)

Ⅱ－２．発達援助部門

Ⅱ－２－１．SAT事業

1. SAT活動の目的

SAT活動の概要を簡単に述べると次のようになる。

これは都留市教育委員会の協力の下、市内小中学校に対して学生アシスタント・ティーチャー(SAT)を派遣し、放課後の学習支援(Aタイプ)と、授業時間中に教師と共にT・Tのひとりとして活動する(Bタイプ)、「不登校傾向」「障害」等による困難をもつ子どもへの個別的な支援を行う(Cタイプ)ものである。活動の領域と内容にそれぞれちがいはあるが、

いずれも重層的な「子ども体験」を学生がくぐって、それを「言語化」することを通じて「反省的な実践家」としての教師の姿勢を身につけていくことを目的とする。

また、運営にあたってはSAT運営委員会を設けて、都留市教育委員会・大学・小中学校の三者が協力して行っており、このような学校間連携・ネットワークの構築も地域を基盤とする教師養成教育の実践活動でもある。

2. 活動の内容

2013年度は、新たな教職課程の必修科目『教職実践演習』（学校参加）型において、SAT活動が取り入れられたこともあり、市内すべての小中学校においてA・B両タイプの活動を行った。なお、Cタイプについては一定の専門的知見が必要なこともあり、臨床教育学専攻学生のみでの活動となっており、子どもの状態に合わせた適切な支援が必要なものもあって、年度当初に各学校から出される要請を勘案しながら学生を配置している。

以下のような参加状況のもと、SATの活動を行った。

平成25年度SAT配置事業派遣数

平成26年2月27日

	学生数（延人数）							活動数（延回数）						
	前期		後期		合計			前期		後期		合計		
	A	B	A	B	A	B	C	A	B	A	B	A	B	C
谷村第一小学校	20	17	20	18	40	35	7	89	90	133	161	222	251	142
谷村第二小学校	4	10	4	10	8	20		29	71	26	108	55	179	
文大学附属小学校	12	5	13	6	25	11	2	104	40	84	42	188	82	44
東桂小学校	11	14	6	14	17	28	9	72	98	48	159	120	257	168
宝小学校	3	6	3	6	6	12	1	20	42	25	56	45	98	15
禾生第一小学校	11	12	9	12	20	24	6	77	78	54	88	131	166	113
禾生第二小学校	3	12	3	12	6	24	6	22	91	45	158	67	249	114
旭小学校	7	3	7	3	14	6		55	30	67	25	122	55	
都留第一中学校	18	12	18	13	36	25	2	137	93	146	104	283	197	43
都留第二中学校	5	16	5	17	10	33		25	87	45	133	70	220	
東桂中学校	9	13	9	13	18	26		37	69	48	76	85	145	
小計	103	120	97	124	200	244	33	667	789	721	1,110	1,388	1,899	639
合計	223		221		477 (228)			1,456		1,831		3,926		

()内実人数

3. 今年度の活動の総括

都留市SAT運営委員会では、2014年2月27日に一年間の活動の総括を行った。その際、各学校から出された意見を総合すると以下の通りである。

- ① 全体を通して例年通り、学生、各学校・保護者ともおおむね満足度が高かった。
- ② 『教職実践演習』の必修化に伴い、活動に熱心でない学生が出るかと思われたが、むしろ

4年生が多かったこともあってか、極めて熱心に取り組んでいた様子がうかがえた。また振り返りの授業への参加状況や話し合いの質も満足できるものであった。

- ③ 一方、少数ではあるが、無断欠席、遅刻、担当教員への不適切なふるまいなどで、学校現場に迷惑をかけることがあった。
- ④ 教職実践演習の単位になるにもかかわらず、学生によって参加回数、活動時間に大きな開きがあり、今後検討の必要がある。
- ⑤ この活動が、単なるお手伝いではなく、学生にとっても自らの教師像を考える良い機会とするためには、一層の工夫と仕組みの開発が求められる。

(文責・筒井潤子)

II-2-2. 地域教育相談室

(1) はじめに

地域教育相談室の活動は本年度で11年目に入り、以下の活動を行った。なお、⑥の山梨教育カウンセリング研究会との共催による活動は本年度より新規に取り組んだものである。概要については(2)(3)(4)に記述した。

- ① 来室、訪問、電話・ファックス・電子メール等による相談活動
- ② 教育委員会等が主催する教職員研修への講師派遣やサポート
- ③ 校内研究等への講師派遣及びサポート
- ④ 公開教育講座等の研修会の実施
- ⑤ 都留市教育研修センターと連携した現職教員メンタルヘルスサポート
- ⑥ 山梨教育カウンセリング研究会との共催による活動
- ⑦ その他(地域の教育関連団体からの依頼への対応)

(2) 相談、研修依頼件数と種別

平成25年度に、地域教育相談室で受けた相談、講師依頼の概要については以下の通りである。①の「その他の事務的対応」とは、講師派遣や研修会のサポート活動に必要な事務的な対応である。②は研修会の内容や進め方についてのアドバイスと事務処理を分けてカウントすることが難しいため、その両方をあわせて集計した。①～④の相談件数をさらに集計した総数を⑤にまとめた。

昨年度も北麓・東部地域への対応が増したが、今年度はそれがさらに顕著になってきている。山梨県教育カウンセリング研究会の活動で近隣の教師との交流ができたことにより相談室の存在が認知されてきているのではないと思われる。それにともない、相談室の現状から70件が妥当と考えている訪問による活動が今年度は100件を超えている。訪問活動の内容とも関連するがQ-Uの結果を活用した取り組みのサポートが多く、時期的には5月後

半から8月末に集中するため負担も大きく対応できないことも多かった。来室による相談が増加しているがそのほとんどが北麓・東部で、Q-U結果の分析、学級経営のコンサルテーション、児童生徒への対応のスーパーバイズが主な内容である。また、電話（FAX含む）による対応が減りメールによる対応が増加しているが、前年度より継続しての訪問要請が多いためと思われる。

①電話&FAXによる相談活動の概要（担当者が携帯電話で行った対応、OB支援は除く）

相談内容	地域別対応件数			合計
	北麓・東部	県内	県外	
児童生徒の問題行動についての対応	0	0	2	2
校内研究・調査・研究の進め方や内容についてのコンサルテーション	4	1	9	14
その他の事務的対応	35	13	83	131
合計	39	14	94	147

②メールによる相談活動及び事務処理の概要（応答を1回とカウント）

相談内容	地域別対応件数			合計
	北麓・東部	県内	県外	
研修会の進め方・事務処理	106	70	234	410
学級・学年経営、メンタルヘルスなど	0	0	5	5
合計	106	70	239	415

③来室による相談活動の概要

相談内容	地域別対応件数			合計
	北麓・東部	県内	県外	
研修会及び会議の進め方など	7	0	0	7
学級・学年経営、メンタルヘルスなど	8	1	1	10
その他	6	0	0	6
合計	21	1	1	23

④訪問による相談活動

相談内容	地域別対応件数			合計
	北麓・東部	県内	県外	
Q-Uによる学級集団の理解と対応のポイント	11	4	14	29
Q-Uの結果に基づく学級コンサルテーション	4	4	34	42
学級集団育成の具体的な方法についての理論と体験	3	4	25	32
その他	0	0	2	2
合計	18	12	75	105

⑤形態別による相談活動の概要

形 態	地域別対応件数			合 計
	北麓・東部	県 内	県 外	
電話 & FAX	39	14	94	147
メー ル	106	70	239	415
来 室	21	1	1	23
訪 問	18	12	75	105
合 計	184	97	409	690

⑥OB 支援活動

A 教諭（大月市立小学校）3回、B 教諭（富士吉田市立小学校）1回、C 教諭（東京都立小学校養護教諭）1回の面接による支援を行った。

(3) 教育関連講座・研修会の実施

地域教育相談室主催の公開講座を例年通り 2 回計画した。1 回目は、以下の通り実施できたが、毎年開催していた 2 回目の構成的グループエンカウンター講座は 2 月の大雪のため残念ながら中止となった。

1) 第 1 回公開講座

日 時：2013 年 5 月 24 日（金）18：30～20：15

内 容：「スポーツと育てるカウンセリング～ロンドンで見たチーム JAPAN の絆の強さ～」

講 師：土屋裕睦氏（大阪体育大学大学院教授・体育科学博士）

場 所：都留文科大学 2 号館 2101 教室

参加者：65 名（教育関係者 25 名、スポーツ選手及び指導者 7 名、一般 27 名、学生 6 名）

概 要：まず、ロンドンオリンピックでの卓球女子団体やフェンシング団体、水泳や女子バレーボールなどの活躍を例に挙げながらチームワークの重要性について説明された。次に、自身がかかわられた指導者に不満を持つ選手やここぞという場で勝てない選手のカウンセリング、大会直前にエースをけがで欠くというピンチに陥った名門バスケットボールチーム（大学女子）へのサポートについて紹介された。後半は、メンタルトレーニングについて実習を交えて紹介、選手の事実の不合理的な受け止め方の修正、「ねばならない」から「だったらいいな」への転換、構成的グループエンカウンターของทีมビルディングへの有効など、スポーツだけでなく学校現場や家庭でも応用できる様々な知見を学ぶことができた。例年の公開講座の参加者は学校関係者が中心であるが、今回は地域でスポーツ指導をしている方々の参加が多かった。学生の参加が少なく、広報の時期や方法に課題が残った。

<参考> 参加者の感想（抜粋）

1. 学生の部

- ◇正直、最初はあまり期待せずにやってきました。しかし、内容はどれも為になるもので、特に抽象的だったメンタルトレーニングのやり方が少し明らかになったのはありがたかったです。驚いたのは、講演会なのに隣の人と話す機会があったということです。(20代男性・学生)
- ◇今回一人で参加したのですが、自分の将来について再度考える良い機会になりました。“しなければならぬ”という考えではなく“こうなったらいいなあ”と言う発想の転換をしてこれから生活をしていきたいと思いました。(10代女性・学生)
- ◇スポーツを観ること、やることに大変興味がありました。教育に関する講演だと思わず参加しましたが、思いがけず自分が目指す教員の道と交わる内容で興味深く聞きました。もっと長く聴いてみたい、質の高い講座でした。ありがとうございました。(20代男性・学生)
- ◇現在、ソフトボール部に在籍し、日々練習しています。私の部活は、1、2年生の時はチームの雰囲気は良くありませんでした。ある時、チーム全員で本音を出して学年を忘れて話し合いました。そこからチームは強くなり、又、楽しく取り組めるようになりました。この事は体験として知っていたのですが、理論としては知りませんでした。将来、私が指導者になったらぜひとも実践したいと思います。今日の話は、大学の部活をしている人たちにぜひとも聞いてほしいと思いました。(20代男性・学生)
- ◇私自身もこれまでチームスポーツをやってきて、「メンタル」や「イメージ」が大切であることは考えていましたが、実際にそれを考えてトレーニングをやったことはほとんど無いと実感しました。今日の講演から学んだことを自分自身や部活の方にも生かしていきたいと思います。(20代男性・学生)
- ◇とてもとてもおもしろいお話でした。自分自身、テニス部に所属していて今年引退なのですが挫折しそうになることもあって、うまく試合に勝てないことが続いていました。イメージすることや「must」で考えないこと、色々自分自身でやってみようと思います。そして自分が将来的に指導できる立場になったときぜひ実践してみたいです。周りの方と関わったこともとてもおもしろく良かったです。イメージすることで気持ちがポジティブになって上手くいくと考えられました。楽しいお話をありがとうございました。(20代女性・学生)

2. 教育関係者の部

- ◇部活動のことはもちろんですが、学級経営にも参考になりました。イメージ・言葉かけ・聞くこと、日頃の実践に生かしていきたいと思います。(20代男性・中学校教員)
- ◇日頃部活動においてメンタルの事は関心を持っていました。今回、土屋先生の話から様々なアドバイスを頂けたと感じています。目標の大切さ、また、エンカウンターによる本音の交流の重要性等も学ばせて頂きました。部活動はもちろん、学級指導の場面において実践していきたいと思います。ありがとうございました。(30代男性・中学校教員)
- ◇普段見落としがちなチームづくりの土台に気付かせてもらった。エンカウンターは学級で実践した経験はあるが、自分のチームで行っていない事に気付き「はっ」とした。チームのルーティンなども積極的に取り入れてみたい。部活のチームでもクラスでも。(30代男性・中学校教員)
- ◇國分先生の本を読んだことがあります。教育の場面、チームづくりの場面に生かしていけるヒントを頂きました。また、土屋先生の話に引き込まれました。(40代男性・中学校教員)
- ◇自分自身のイメージの持ち方やその特性について学ぶことができた。また、メンタルトレーニングがどのように活用されるかを具体例を踏まえて学べたので良かったと思います。(30代男性・中学校教員)
- ◇今、部活動を見ているので、大変参考になりました。私のチームにも、今、メンタルの弱さが課題

になっています。普段からのイメージをもたせることでもっとチームのメンタルを強く持てるかなと思いました。ありがとうございました。(20代女性・中学校教員)

- ◇トップレベルの実際のお話を具体的に聞くことができる機会となり、本当によかったと思います。この地域にいて、しかも無料で勉強できることができてとても有意義でした。(40代男性・小学校教員)
- ◇すごく勇気と可能性をもらいました。イメージすることの大切さ、本音で語るることの大切さ、一つ一つをこれから指導で実践していきます。ありがとうございました。(40代男性・中学校教員)
- ◇スポーツにおけるチーム作りは、学校における教員同士のチームづくりに共通することを改めて学びました。仕事が終わってから足を運んで良かったと思いました。ありがとうございました。(40代男性・中学校教員)
- ◇ありがとうございました。途中からの参加でしたので、最初の方が聞けず、非常に残念でした。イメージをする方法がとても興味深く子どもにも(もう少し簡単にして)試してもらおうと思いました。体験的イメージを繰り返すこと、そこから行動にうつすことが大切だと感じました。ありがとうございました。(30代女性・中学校教員)
- ◇イメージトレーニング、目標設定…、いろいろと参考になるお話で勉強になりました。本音と本音で語ること、こうなったらいいなという考え方、大切にしていきたいと思います。(40代女性・教育関係者)
- ◇今回の講座で土屋先生から教えて頂いたことは、基本的に一人一人を大切にしたいチームづくり、その一人を大切にするためのイメージトレーニングを紹介して頂いたと感じています。その人の持っている枠を外し、一人一人が枠を外せたときに実に大きな力を生むのだと改めて思いました。(60代男性・教育関係者)
- ◇メンタル指導の具体的な方法や実践例を聞いてとても勉強になりました。自信は練習時間と経験だと思われていたが、今回の講演会に参加させていただいて明日からの部活動の指導が楽しみになりました。まずは、簡単にできるルーティンはすぐ実践したいです(特にプラスのルーティンを)。本日は、遠いところまで来て頂きありがとうございました。(30代女性・中学校教員)
- ◇集団の力、その力を発揮させるための構成的グループエンカウンター。管理の限界→体罰、指導者の満足でしかない。チーム一人一人の満足度、選手の満足度をいかに高められるか、それが指導者のすべき事だと思う。(40代男性・中学校教員)
- ◇最新のスポーツ科学の心理面、メンタル面について捉え方が変わってきていることをあらためて認識できた。(20代男性・教育関係者)
- ◇メンタルの幅があることが理解できた。スポ少の指導者として小中学生を指導しているが、メンタルの具体的な対処をする事で、明確な目標設定が出来ると思う。現在の子どもたちは目標値があまり持てない(持ちづらい時代ではあるが…)スポーツを通してのメンタルトレーニングを行うことで将来的な行動を左右できるのではないかと思う。(50代男性・教育関係者)
- ◇大変役に立ちました。プレッシャーにとっても弱い自分でした。「~になったら楽しいだろう」という気持ちが大切なことが分かりました。また、文字化することも必要であること等、参考になりました。タイムリーなテーマで良い勉強になりました。(50代男性・小学校教員)
- ◇ありがとうございました。イメージトレーニングやグループエンカウンター等の実際の活動を交えてのお話で、一つ一つのことがとても理解しやすかったです。機会を捉えて多くの先生方にも紹介していきたいと思います。(50代男性・教育関係者)

3. スポーツ関係者・一般の部

- ◇元気になった気分です。家庭に、クラブチームに、仕事に生かしたいと思います。ありがとうございました。(40代女性・保護者)
- ◇射撃競技はメンタル、イメージトレーニングについて重要なトレーニングであり、講座から選手指導に何かプラスしたい。選手が競技をするには、多くの役員、審判が必要であり、これらの人々が

- 選手を見る学習(?)はどうあるべきか…。「スポーツと育てるカウンセリング」都留文科大でスポーツ学を学べる機会(教育)をもっと多く作るべきである。(70代男性・山梨県ライフル射撃協会会長)
- ◇イメージすること、夢を持つこと、夢を語ることで楽しいなあ…、大事だなあ…、と感じました。子育てにも活かせそうです。聞き入ってしまいました。ありがとうございました。
(30代女性・保護者)
- ◇勉強になりました。もっとゆっくり聞けたらいいなと思いました。短時間でできるメンタルトレーニングについて知りたいと思います。(40代男性・保護者)
- ◇選手を育てる良い方法であると思う。選手の年齢別のカウンセリングを聞きたかった。また、指導者を育成するカウンセリングについて教えて頂きたいと思った。(50代男性・公務員)
- ◇イメージとメンタルとの関連性、重要性を改めて実感した。メンタルトレーニングの分類が理解できたことは今後役に立つのではないか。メンタルトレーニングの活用を今後していきたい。
(50代男性・公務員)
- ◇大変興味深いお話をいただきました。息子がスポーツ(バスケット)を熱心に行っていますので役立たせて頂きます。ありがとうございました。(40代男性・公務員)
- ◇ミニバスを指導していますが、チームワークという所で力が欠如しているように感じていました。具体的にどうすればよいか…、と思っていたので、今回の講演を聞いて構成的グループエンカウンターという指導法を初めて知ったので、小学生向けにアレンジして実践してみようと思いました。あつすぎる保護者もいるので保護者向けにはどのような話をしたら良いのか次回に教えていただけたらと思います。(20代女性・スポーツ少年団指導者)
- ◇この所、チームと自分の方向性について厳しくしていく方向のみにベクトルが向いていた。本日の話を聞いて、忘れかけていたもの、また、教わった方法を早速楽しみながら実践してみたいと思います。(40代男性・地方公務員、グラススキー指導者)
- ◇心を「must」から解放する、自身をイメージする楽しい講演でした。(40代男性・公務員)
- ◇今、チーム内で悩んでいる時にとてもすばらしいお話に感激しました。チームに戻って少しでも多く実践し、目標達成に近づけて行きたいと思います。(60代女性・チーム監督)
- ◇体育・運動指導者として大変良い内容でありました。今後役に立たいと思います。
(60代男性・体育協会)
- ◇2つの立場で聞かせて頂きました。どちらにも置き換えて考えてみました。指導の立場、選手の立場、それぞれで、いろいろイメージできたのがおもしろかったし、なんだかテンションが上がりました。また土屋先生に来て頂き、いろいろな人に聞いてもらいたいです。質問に答えて頂きありがとうございました。(30代女性・インストラクター・バレーボール選手)
- ◇スポーツに関わっていますが、やはりメンタル面の重要性を一番強く感じています。どのようにすれば力が発揮できるか、日々考えていました。今回の講演でたくさんのヒントを頂きました。少しでも実現できるようやっていきたいと思います。質問に答えて頂きありがとうございました。
(40代女性・スポーツ指導者)

スポーツの人材育成、チームづくりとは

スポーツ界や教育現場で問題となっている体罰。指導者に強制力によらない指導をしてもらおうと、大阪体育大の土屋裕睦教授が24日、都留文科大で、スポーツにおけるチームづくりや人材育成をテーマに講演した。土屋教授はメンタルトレーニングや、選手同士の会話により意識を共有することの重要性を強調。「選手の気持ちや触れ合いを大事にしてほしい」と指摘した。〈土屋圭佑〉

大体大・土屋教授 都留文大で講演

バスケットボール部で体罰を受けていた大阪市立桜宮高校の男子生徒が自殺した問題を踏まえて都留文科大が企画。スポーツカウンセリングが専門の土屋教授が「スポーツと育てるカウンセリング」と題して講演した。教員ら約70人が参加した。

心理的なスキル

「チームワークって本当に大切ですね。土屋教授は講演会の冒頭、こう切り出した。日本が史上最多の38個のメダルを獲得したロンドン五輪。28年ぶりの銅メダルを獲得したバレーボール女子、リレーで銀メダルを取った競泳

「たいあたり蹴ったりしてもチーム力は上がらない。カウンセリングでチームワークは高められる」と強調した。チームワークの核となるのが選手やチーム全体の「メンタル」。土屋教授は「メンタルは心理的なスキル。トレーニングにより鍛えられる」とする。

方法としてイメージトレーニングを紹介。イメージトレーニングで重要なのは、①具体的な課題を設定する②イメージする③イメージを振り返る④イメージを繰り返すの四つを挙げた。課題設定には、今年、来年の具体的な目標設定が必要で、呼び掛けた。

メンタル鍛え意識を共有



「罰や強制力ではチームは強くない。カウンセリングを使うことでチームワークは高められる」と話す土屋裕睦教授—都留文科大

。体格で劣る日本チームが、チーム種目で結果を残したという視点で目標設定することがポイント。イメージするときは、実際に体験しているかのように想像すると効果が上がるといふ。

本音語り合う場

実際にチームワークを高めるにはどうしたらいいか。土屋教授は「構成的グループ・エンカウンター」を紹介した。本音を語り合う場を設定し、共通意識をつくり出す手法で、教育現場に導入されている。エンカウンターによるチームづくりでは、「目標設定」「イメージトレーニング」「シェアリング」を順番に行う。この工程をチーム内のペアやグループで行うことで、選手同士の意識の共有や共通理解を広げていく。ピンチのときの合言葉や合図など、チームのルールも決めることでより共通意識が深まるという。

2013年5月28日 山梨日日新聞掲載

(4) 山梨県内の教育委員会及びその他の教育関係団体との連携

1) 都留市教育研修センターとの連携

今年度も都留市現職教員メンタルヘルスサポート事業として、年12回の面接日を設定し、都留市新転入・新採用教員の研修会で学級経営についての講演と相談室の利用の仕方についての説明を行った。

しかし、1つの学校を2回訪問し、述べ11学級のコンサルテーションを実施したほかには活用がなく、地元での活動の難しさを痛感している。

2) 南都留教育相談ネットワーク会議

地域の教育、福祉関係の担当者が年3回集まり、連携を目標に情報交換をしたり、活動を紹介し合ったりしている。3回目の会議では、地域教育相談室の活動について紹介した。

3) 富士吉田市教育委員会

本年度も、「富士吉田市問題を抱える子ども等の自立支援事業」の運営協議会の代表として協力し、年2回の会議では座長を務めた。また、富士吉田市教育研修所の依頼を受け、Q-Uの基礎講座と事例研究の仕方について研修を2回、各中学校区ごとにQ-Uデータの活用の仕方について実習を交えて説明した。また、学校サポートチームの活動として1つの中学校を定期的に訪問し支援を行った。例年実施してきたソーシャルスキルトレーニングの実技研修は2月の大雪の影響で中止となった。

4) 山梨教育カウンセリング研究会

共催の形で原則として月1回の研究会を開催(5, 6, 7, 9, 10, 11, 12, 1, 3月実施)、近隣の教員の方々と交流の機会を持った。学級経営についての実践発表は参加者の参考になる内容で、直前にポスターを掲示する程度の広報であったが教師を目指す学生の参加も数名あった。

5) 甲州市立塩山中学校

塩山中学校のスクールスーパーバイザーとして年2回、学級経営に活用するグループアプローチ(構成的グループエンカウンター及びソーシャルスキルトレーニング)についての研修会を行っている。参加者は塩山中学校の教員だけでなく、近隣の学校から多数の参加者があった。

(5) 内容別講師派遣先

1日研修で午前と午後で内容が異なる場合、研修会の前後に学級コンサルテーションを依頼される場合、授業研で1学級に重点的に関わりさらに全学級の分析とコンサルテーションを依頼される場合など様々なケースがある。活動の内容を分かりやすく整理する都合上、午前の内容もしくは代表的な対応で整理した場合と内容別に分けた場合があり、「④訪問による相談活動」の件数とは一致しない。

派遣先を見ると、数年継続しての依頼が相変わらず多い。内容的にも昨年度と同様に学級経営の具体的な方法について実習を交えて学習するもの、学級診断とそれに合わせた対応策のコンサルテーションなど実際の学級経営に直接かかわる内容が中心であった。2)は事前に送ってもらったQ-Uデータを分析し、1学級を短時間で解説した数である。そのデータを見ながら全学級の授業を見て回ったケースもある。事前に膨大なデータをチェックすることはピークが重なるのでかなりの負担であり、訪問によるアドバイスを待って対応していたのでは改善につながらないことも多い。学校現場での自力による分析検討の支援が必要である。そこで、ここにカウントはしていないが、休日や夜に地域のリーダーを育成する目的で

自主研修会を行っている。その参加者が自校で事例検討会を指導するなどその成果が少しずつ表れてきている。3) はQ-Uデータと担任の観察データを統合して学級状態を分析、指導案を見ながら1時間の授業参観をし、その後の協議会で分析や助言をした数である。この2つを合わせると、今年度直接対応した学級数は延べ259学級であった。

新しい傾向として、学校現場に入る指導主事の研修会が2件あった。指導主事としての活動期間は2～3年程度の短期間が多く、その介入方法を研究する間もなくいきなり現場に入っていかなければならず、悩みを抱えている場合が多い。今まではメールや研修会で訪問した時の送迎時に相談を受けることが多かったが、今後はこのような研修会にも積極的に関わっていききたい。

1) Q-Uによる学級集団の理解と対応の基礎講座及び事例研究の仕方の研修会

＜山梨県内＞ 富士吉田市教育研修所、南アルプス市教育委員会、富士吉田市立明見中学校、富士吉田市中学校区(吉田・下吉田・明見・富士見台) 都留市新採用・転任研修会、甲斐市立竜王南小学校、都留市教職員組合

＜山梨県外＞ 那須塩原市教育委員会、山形県教育センター、群馬県総合教育センター、山形県舟形町教育委員会、練馬区総合教育センター、千葉市教育センター、可見市立教育研究所、鳥取県教育委員会、上越市立教育センター、郡山市立安積中学校区

2) Q-Uの結果に基づく学級コンサルテーション及びスーパーバイズ(述べ230学級)

＜山梨県内＞ 富士吉田市立明見中学校(9学級)、南アルプス市立櫛形西小学校(4学級)、富士河口湖町立小立小学校(5学級)、韮崎市立穂坂小学校(5学級)、都留市立旭小学校(5+6学級)、南アルプス市立櫛形中学校(3学級)、中央市立田富中学校(3学級)、道志村立道志小・中学校(2学級)、富士河口湖町立勝山中学校(4学級)

＜山梨県外＞ 郡山市行健中学校区(2学級×2)、北区立柳田小学校(3学級)、可見市立広陵中学校(6+1+1学級)、可見市立帷子小学校(2+2+2学級)、那須塩原市立那須南小学校(12学級×2回)、那須塩原市立東那須野中学校(9学級×2回)、那須塩原市立埼玉小学校(13学級)、那須塩原市立厚崎中学校(12学級×2回)、那須塩原市立那須西小学校(12学級×2回)、練馬区立八坂小学校(12学級)、鳥羽市弘道中学校区(2学級×2)、可見市立春里小学校(3学級)、いなべ市立員弁中学校(12学級)、桑名市立多度青葉小学校(5+6学級)、那須塩原市立共英小学校(18学級)

3) Q-Uの結果に基づいた授業研究の助言者(述べ29学級)

＜山梨県内＞ 南アルプス市立大明小学校(1学級×2回)、富士河口湖町立小立小学校(1学級)

＜山梨県外＞ 那須塩原市立南小学校(2学級×2回)、那須塩原市立東那須野中学校(2学級×2回)、那須塩原市立埼玉小学校(3学級)、那須塩原市立厚崎中学校(2学級×2回)、那須塩原市立那須西小学校(2学級×2回)、三重県いなべ市立北勢中学校(1学級)、郡山市立行健中学校(1学級×2回)、秋田市立中通小学校(2学級)、那須塩原市立共英小学校(2学級)

4) 特別支援教育を推進する学級経営

＜山梨県内＞ なし

＜山梨県外＞ 福井県奥越地区特別支援研修会

5) 構成的グループエンカウンター及びソーシャルスキル教育

＜山梨県内＞ 上野原市立上野原小学校、南アルプス市立白根飯野小学校、南アルプス市立大明小学校、富士吉田市立明見中学校（2回）、甲州市立塩山中学校（2回）、南アルプス市立小笠原小学校

＜山梨県外＞ 葛飾区総合教育センター（4回）、柏崎市教育センター、宇都宮市教育委員会、群馬県総合教育センター、目黒区めぐろ学校サポートセンター、下野市教育研究会、伊勢原市立教育センター、那須塩原市教育委員会、郡山市教育研修センター（2回）、逗子市立教育研究所、練馬区立立野小学校、練馬区立大泉北中学校、墨田区立小学校教育研究会・教育相談部、三重県伊賀市教育センター、柏崎市立第三中学校区、江戸川区立鹿骨小学校、福島市教育センター、北区教育委員会

6) その他

郡山市教育研修センター、山形県教育センター、鳥取県教育委員会、桑名市立多度青葉小学校、桑名市教育委員会

(6) まとめ

(2)の「相談、研修依頼件数と種別」でも明らかなように、北麓・東部地域への対応がさらに増加している。相談担当者と地域の人とのネットワーク形成が進んでいることを実感している。一方で、今年度も都留市教育研修センターとの連携による現職教員のメンタルヘルスサポートの活用は少なく改善ができなかった。現場の教員やセンターの担当者から情報を収集し、子どもたちの発達によりよい援助に寄与できるような活動のあり方を検討していきたいと考えている。

公開講座については、関心が高くタイムリーな企画をしているつもりであるが、今年度も参加人数は思ったほど多くなかった。教育関係者以外の参加者が多かったことは大きな収穫である。アンケートや感想からは内容に満足していることが伺えるので広報の仕方、申し込み方法などの問題が考えられる。次年度は、多くの地域の方々に情報が伝わる工夫をしたいと考えている。また、1回目の講座の講師である土屋先生からスポーツにも構成的グループエンカウンターが有効であることが紹介され、2回目の公開講座では学校現場だけでなく様々な集団で活用できる内容の紹介を計画したが大雪のために実施できず残念であった。次年度にはぜひ実施したいと考えている。

山梨県内の活動であるが、山梨県教育研究所を通じた依頼が今年度も多かった。学級集団理解のツールであるQ-Uを自治体単位で実施するところが多く、その地域からの依頼も多

い。しかし、その時期が集中するため、対応しきれていないのが現状である。他県で実施して効果を上げているリーダー育成研修の実施等を今後は検討していきたい。また、来室による相談で学校現場に出向く予定の講師のスーパーバイズが数回あった。リーダー研修同様に、直接対応しきれない状況を改善するためには重要である。今後も意識してやっていきたい。

最後に、今後の相談室のあり方について述べたい。学校現場への直接介入や教育委員会主催の研修会を通して、教師が現状を把握し、それに合った対応策を考えて教育実践をしていくことがますます困難になっていると感じる。ベテラン教員は社会の変化に伴う子どもたちの変化に対応しきれず、若手教員は子どもたちにかかわるスキルの不足で苦戦している。首都圏などベテランが退職し若手教員が増えている地域に入ると問題にどのように対応したらよいか分からずおろおろしている若手教員に出会う。現状と教師の指導行動とのミスマッチである。Q-Uの実施が440万人の児童生徒に広がっているのもこの状況を反映しているのではないかと考える。集団は人を癒やす一方で状態が悪化すれば、ストレスが多く時には生命が脅かされる状況に陥ってしまう。学級集団を単位として教育実践を行っている日本の現行の学校制度では学級経営の理論と方法が不可欠である。相談室への依頼内容を見てもそれは納得できる。このような教育現場のニーズに対応し、子どもたちの健全な発達を支援できるように今後も努めていきたいと考えている。

<H 26年度の活動計画>

1. 研修会の企画・運営
 - ・公開講座を年2回程度実施
2. 山梨県内の学校教育サポート
 - ・富士吉田市教育委員会、山梨県教育研究所、甲州市教育委員会との連携
 - ・富士吉田市立明見中学校区の小中連携のサポート
 - ・その他、各校内研修会への講師派遣
3. 地域の活動への協力
 - ・南都留教育相談ネットワーク会議への参加
 - ・都留市教育研修センターとの連携による教師サポート
 - ・「富士吉田市問題を抱える子ども等の自立支援事業」への協力
 - ・山梨県教育カウンセリング研究会との共催による活動
4. 相談活動
 - ・教師の学級経営のコンサルテーション及びスーパーバイズ
 - ・教師・教育関係者個人の臨床的問題への対応
 - ・卒業生の学級経営サポート
5. 東日本大震災被災地支援活動

6. その他

- ・横浜市スクールスーパーバイザー
- ・那須塩原市教育委員会との連携
- ・郡山市教育委員会との連携（被災地支援を含む）

（文責・品田笑子）

Ⅱ－２－３．地域情報教育

1. 活動指針

2007年度（平成19年度）から地域交流研究センターにおける活動の柱の一つである「発達援助部門」の中の分野の一つとして「地域情報教育」が取り込まれました。

「地域情報教育」における活動の指針として、当初は下記（1）～（3）までを掲げ、更に2011年度からは、初等教育学科図工・美術教室の鳥原先生が中心となって活動している、地域への美術教育支援プログラムの中で、旭小学校をフィールドとした（4）図工・美術と情報の連携した教育システム作りプロジェクト（たからばこ作戦）を立ち上げたことにより、4つの柱として活動してきました。

（1）小中学校への情報リテラシー・ネットワーク・セキュリティ教育支援

- ・都留市情報教育研究委員会（教育委員会、全小中学校情報教育担当者）への参加
- ・ICTを利用した学校業務に関する研修会の開催
- ・それぞれの学校の情報教育への支援

（2）遠隔授業の実施と支援

- ・大学と小中学校間での遠隔授業の実施
- ・小中学校間の交流プログラムの支援
- ・e-learningへの取り組み

（3）ホームページ作成と運用における支援

- ・小中学校の公式ホームページの作成支援
- ・定期的な更新に関わる運用支援
- ・小中学校ホームページ作成担当者への研修支援

（4）図工・美術と情報の連携した教育システム作りプロジェクト（たからばこ作戦）

- ・旭小学校、子どもアトリエ（兵庫県西宮市）を協力校・組織とする
- ・保護者への説明、作品の撮影及び利用に関する許諾を得る
- ・交流支援

これらの活動の中において、(3) ホームページ作成と運用における支援においては、これまでも、小中学校の担当者によるホームページ更新頻度の差、全体構成における新規性等の問題も抱え、大学における指導の限界を感じており、これらの問題解決の方策について関係各機関とも相談を重ね、今年度からは都留市教育委員会が全小中学校のホームページの管理を行うことにし、Webサーバーについても、都留市役所の公式サイトでの一括運用管理でお願いすることとし、新しいホームページシステムがスタートしたことにより、これまでの役割を果たしたことになった。また、(2) 遠隔授業の実施と支援においても、これを実施するための、各小中学校における事前準備の負担からか、積極的に取り組んで活動を実施することができなかった。

このような状況から、活動の柱(2)については、次年度からは取り組み内容の変更・検討の必要があり、(3)については外すことにした。

2. 平成 25 年度の活動

☆平成 25 年 4 月 25 日(木) 9:30～

旭小学校訪問(校長・教頭先生への「たからばこ」プロジェクトの説明)

☆平成 25 年 5 月 24 日(金)～25 日(土)

兵庫県西宮市「子どもアトリエ」の『さつき展 2013』で、作品撮影と著作利用に対する許諾を得る

☆平成 25 年 6 月 28 日(金) 10:00～11:00

都留第二中学校の旭小学校卒業生の美術作品の撮影に関するお願いを「たからばこ」プロジェクトについて校長先生や担当の渡辺和子先生に説明、理解を得る

☆平成 25 年 7 月 7 日(日) 8:30～17:30

教員免許状更新講習「情報」(デジタル教材の新しい世界と情報モラル教育の指導)を担当、受講申請:44名、出席者:42名

☆平成 25 年 8 月 20 日(火)

都留第二中学校において旭小学校出身の1年生の作品撮影

☆平成 25 年 10 月 21 日(月) 13:30～ 東京都台東区上野

「たからばこ」システムにおける、課題解決のためのシステム変更について(株)CMSコミュニケーションズの担当者、情報センターの大輪知穂氏、鳥原先生、杉本で打ち合わせ

☆平成 25 年 11 月 3 日(日)

東京藝術大学の美術教育研究会において「たからばこ作戦」の取り組みについて、鳥原先生、

館山先生が研究および活動報告

☆平成 26 年 2 月 22 日(土)

第 10 回地域交流研究フォーラムにおいて「たからばこ作戦」についてのカンファレンスを予定したが、14 日からの大雪被害甚大のため中止

3. 平成 26 年度における活動予定

- ①小中学校への支援計画について都留市教育委員会や教育センターと協議
- ②遠隔授業・交流プログラムの実施にむけて新しい方向性の検討
- ③「たからばこ作戦」の実践

(文責・杉本光司)

Ⅱ－２－４．地域美術教育

1. 活動指針

平成 23 年度より、地域交流研究センターの『発達援助部門』の新分野として「地域美術教育」が認められた。これにより図工・美術教室全体で地域の美術教育に関わる地域貢献活動として実践することとなった。25 年度もこれらの事業を継続した。主な活動は以下の 3 つである。

- (1) 都留市教育協議会美術研究部学習会（都留市内小・中学校教員との勉強会）の運営
- (2) たからばこ作戦（都留市立旭小学校と兵庫県の造形教室の連携による研究活動）
- (3) 都留市・県内各地の美術教育活動への協力支援

2. 平成 25 年度の活動実績

(1) 都留市教育協議会美術研究部学習会（都留市内小・中学校教員との勉強会）

都留市近隣の小・中学校教員と本学教員による勉強会を開催した。本勉強会では本学情報ゼミ室で実際にデジタル黒板に触れながら、デジタル黒板を使った図画工作の活動について参加者同士意見交換を行った。(8 月 21 日 9:00～15:00 情報ゼミ)

(2) たからばこ作戦

平成 25 年度の活動は以下の通りであった。

- ①平成 25 年 4 月 25 日(木) 9:30～

旭小学校訪問（校長・教頭先生への「たからばこ」プロジェクトの説明）

- ②平成 25 年 5 月 24 日(金)～25 日(土)

兵庫県西宮市「子どもアトリエ」の『さつき展 2013』で、作品撮影と著作利用に対する許諾を得る

③平成 25 年 6 月 28 日(金) 10:00 ~ 11:00

都留第二中学校の旭小学校卒業生の美術作品の撮影に関するお願いを「たからばこ」プロジェクトについて校長先生や担当の渡辺和子先生に説明、理解を得る

④平成 25 年 8 月 20 日(火)

都留第二中学校において旭小学校出身の 1 年生の作品撮影

⑤平成 25 年 10 月 21 日(月) 13:30 ~ 東京都台東区上野

「たからばこ」システムにおける、課題解決のためのシステム変更について(株)CMS コミュニケーションズの担当者、情報センターの大輪知穂氏、杉本先生、鳥原で打ち合わせ

⑥平成 25 年 10 月 31 日(木)

口頭発表『デジタルデータベースを使った図画工作のあらたな試み ~旭小学校における「たからばこ作戦」の実践を通して~平成 25 年度山梨県南都留地域教育フォーラム』
発表者: 館山拓人、鳥原ゼミ学生 2 名

⑦平成 25 年 11 月 3 日(日)

東京藝術大学の美術教育研究会において「たからばこ作戦」の取り組みについて、口頭発表『図画工作科におけるデジタルデータベースの教育的可能性—都留市立旭小学校における取り組みを通して(発表者: 鳥原正敏)』と、口頭発表『図画工作教育支援での評価に関する試み—小学校教員を志望する学生への教育的効果について—(発表者: 館山拓人)』を行った

⑧平成 26 年 2 月 22 日(土)

第 10 回地域交流研究センターフォーラムにおいて「たからばこ作戦」についてのカンファレンスを予定したが、14 日からの大雪被害甚大のため中止

⑨ICT を活用した日常的に活用可能な鑑賞装置「たからばこ型」と「かみしばい型」を製作

(3) 都留市・県内各地の美術教育活動への協力支援

①「つる宝カルタ」への製作協力。都留青年会議所からの依頼により製作に参加。図工美術教室の学生と共に原画 45 枚を製作。原画の制作者から著作の許諾を得た。これを地域交流研究センターで管理、原画は竹下研究室で管理している。



一般社団法人 都留青年会議所 「つるの宝かるた」

<p>て 手もろくせば さよふ水が流れる 鹿沼川 都留市 鹿沼川 1997年10月1日発行</p>		こ こからの ながめはさいこう お城山 都留市 お城山 1997年10月1日発行		あ あさやかな 星が色どる たいこの書 都留市 たいこの書 1997年10月1日発行	
<p>と 美たちと ザンパの都留で ガラスズ 都留市 ザンパの都留 1997年10月1日発行</p>		さ サツカで にぎわう緑の 玉川公園 都留市 玉川公園 1997年10月1日発行		い いにしへの家や かから五右衛門 今にこのは 元城の古橋 都留市 元城の古橋 1997年10月1日発行	
<p>な 流れゆく 川の舟にほ おなん湖 都留市 おなん湖 1997年10月1日発行</p>		し しじまいが 笛とたいこで 元氣におどる 寺むねがう法華寺堂 都留市 法華寺堂 1997年10月1日発行		う 上様のい 茶つばをのこす 乳室寺 都留市 乳室寺 1997年10月1日発行	
<p>に にじがまた 太鼓・七郎の たきの上 都留市 太鼓・七郎 1997年10月1日発行</p>		す すこしてね 家族でほかほか お正月もちの湯 都留市 お正月もちの湯 1997年10月1日発行		え エコハウス しぜんにやさしい まちづくり 都留市 エコハウス 1997年10月1日発行	
<p>ぬ ぬけ道の 舟にうにだかる おまうめ 都留市 おまうめ 1997年10月1日発行</p>		せ 全日本で はげましたなら さけりよつたよ 二十六夜山 都留市 二十六夜山 1997年10月1日発行		お おどの娘の おが通るよ おまつば屋中 都留市 おが通るよ 1997年10月1日発行	
<p>ね ねえとてよ くねいな山だ 水積山のさくら 都留市 水積山のさくら 1997年10月1日発行</p>		そ 育ててこう みんなの心と 学校林 都留市 学校林 1997年10月1日発行		か 家中川 昔の人の ちえいっばい 都留市 家中川 1997年10月1日発行	
<p>の 野のやに ひっそりたすむ 大石がね 都留市 野のやに 1997年10月1日発行</p>		た みらいにこそ 響け野川 都留市 響け野川 1997年10月1日発行		き 昔でこん 増やさん 増やさん 都留市 増やさん 1997年10月1日発行	
<p>ち ちよつと多し りやちがもどるな 響け野川 都留市 響け野川 1997年10月1日発行</p>		つ つめたい手 水かけ茶い ばまばの手 都留市 つめたい手 1997年10月1日発行		く 昔長く その日 お八州 都留市 昔長く 1997年10月1日発行	
<p>け 元氣くん くるくるん エコ農園 都留市 エコ農園 1997年10月1日発行</p>				け 元氣くん くるくるん エコ農園 都留市 エコ農園 1997年10月1日発行	

今年度、一般社団法人 都留青年会議所では、都留市内における名所や財産、人物などを題材に「つるの宝かるた」を作成しました。地域の財産を未来へ伝承していくためにかるたという形に残し、未来を担う子供や多くの地域住民の方々に都留市の宝を知っていただく事で自身の住むまちに愛着を持ち、郷土愛を育てていただくという思いで作成させていただきました。読み札は、市内小学校に通う児童より応募いただき、絵札は、都留文科大学の学生の方々に協力いただきました。

主催・発行 一般社団法人 都留青年会議所
 後援 都留市 都留市教育委員会 都留市商工会
 協力 都留市内小学校 都留文科大学
 都留市郷土研究会

わ
わたしの町も
富士山もリニアも
見える森川山



も
森の中
ふるさと帰る
むささびよ



は
御神社
はたは天の
おくり物



を
カメクを手に
ゆのかんな
ジャーナリスト
山本美香



や
休まないで
がんばってよ
川尻美穂



ひ
ひつそりて
かたがらを守る
春日神社



ん
山梨県
都留文科大学
有名だ



ゆ
夕日あび
黄金にかがやく
大原のいね



ふ
ふれあいのまは
しぜんが
嬉しいな



よ
よい子はね
まじり神はに
ありがたみ



へ
平和な日
そつと息を
六地蔵



ら
ランドセル
リュックにかえて
九郎山へ



ほ
ほうほけきよ
うめのおういす
書のうた



り
リニアモーターカー
すこせ
はやいぞ
はっこい



ま
また明日
来たは
来生殿
また見おくる



る
ルイルルを守り
みんなで学んだ
歴史郷土資料館



み
みたくみよう
まじりいせき
真砂原



れ
れんげ草
きれいださいて
市のおうぐいす
市一ツケ草



む
音から
今にやる
二つ葉
二つ葉



ろ
ロワンだね
どうやってける
耳かさり



め
めがねはし
はくらのとがを
見守る



今年度、一般社団法人都留青年会議所では、都留市内における名所や財産、人物などを題材に「つるの宝かるた」を作成しました。地域の財産を未来へ伝承していくためにかるたという形に残し、未来を担う子供や多くの地域住民の方々に都留市の宝を知っていただく事で自身の住むまちに愛着を持ち、郷土愛を育てていただくという思いで作成させていただきました。読み札は、市内小学校に通う児童より応募いただき、絵札は、都留文科大学の学生の方々にご協力いただきました。

主催・発行 一般社団法人都留青年会議所
後援 都留市 都留市教育委員会 都留市商工会
協力 都留市内小学校 都留文科大学
都留市郷土研究会

② 造形教室（宝保育所）

宝保育所で主に年長組を対象とした造形教室を5回行った。

1回目 平成25年7月10日(水)「大きな画用紙に絵を描こう」年長組9名

2回目 平成25年8月22日(木)「アート巣箱を作ろう」年長組9名

3回目 平成25年10月30日(水)「いろいろな道具を使った粘土あそび」年長組9名+年中組16名

4回目 平成25年11月20日(水)「新聞紙で動物をつくろう」年長組9名+年中組16名

5回目 平成25年12月18日(水)「世界に一つだけのお弁当をつくろう」年長組8名

3. 平成26年度の活動計画

- (1) 都留市教育協議会美術研究部学習会の運営を継続
- (2) 「たからばこ作戦」の継続
- (3) 都留市・県内各地の美術教育活動への協力支援を継続
図画工作教室への支援（場所未定）

(文責・鳥原正敏)

Ⅲ. インターフェイスとメディアの活動

Ⅲ-1. 各種講座の開催

(1) 都留文科大学現職教員教育講座

恒例の夏季集中講座を、例年の通り『教師の子ども理解と学習指導』というテーマで行いました。

〈講座の趣旨〉

現在、日本の子どもたちの学力をめぐるのは、さまざまな角度から「問題」とされており、とりわけ、子どもの読解力をどうつけるのか、そして子どもの算数・数学嫌いをどのように克服していったらよいのかをめぐるのは議論の中心になっているといつてよいと思います。しかし、残念なことに、これらのテーマを十分に研究・検討する前に「学力向上」対策が、それぞれの学校や教師に求められているのが現状であるといわざるを得ません。

今回は以上をふまえ、一人ひとりの子どもを理解することをベースに、子どもの思考や感情・感覚に即した学習のあり方を探ることとしたいと思います。特に、学校での生活の大部分を占める授業の場面で、子どもを支える学習指導のあり方を深めていくことを追究したいと思います。

テーマ：教師の子ども理解と学習指導

日時：平成25年7月25日(木)～7月26日(金)

場所：都留文科大学 2号館 2102 教室

参加者：7月25日：19名 7月26日：32名 合計：51名

日程と内容

【第一日目】7月25日(木)

会場：2号館2102教室

午前 9:30～午前 9:45	受講受付 (本学2号館)
午前 9:45～午前10:00	『講座の趣旨について』 説明：杉本 光司 (地域交流研究センター長)
午前10:00～午前12:00	『学習意欲を引き出す学びづくり』 - 社会科教育を通して - 講師：田所 恭介 (本学非常勤講師)
午前12:00～午後 1:00	休憩 (昼 食)
午後 1:00～午後 3:00	『教科に関する研究講座Ⅰ』 - 子どもがわかる授業を作る・理科 - 講師：平野 耕一 (本学初等教育学科准教授)

【第二日目】7月26日(金)

会場：2号館2102教室

午前10:00～午前12:00	『子ども理解と学習指導』 講師：山崎 隆夫 (本学非常勤講師)
午前12:00～午後 1:00	休憩 (昼 食)
午後 1:00～午後 3:00	『教科に関する研究講座Ⅱ』 - 算数を楽しむ授業をつくる - 講師：岡野 恵司 (本学初等教育学科講師)

この講座に関する出席者の感想は、「地域交流センター通信 24 号」36 ページに掲載しております。

(文責・杉本光司)

(2) 都留文科大学子ども公開講座

平成24年度に、新たな試みとして、都留市教育委員会学びのまちづくり課の主催する「放課後子ども教室事業」(本年報「IV-2. 都留市放課後子ども教室事業」参照)と本学の市民公開講座を連携させ、5人の講師による8講座を開催し247人が参加した。この取り組みの結果から、平成25年度からは、市民公開講座と別に「子ども公開講座」と名づけて、放課後子ども教室事業プログラムの中に位置づけ、下記の通り、6人の講師による7講座を開講した。

開催日	テーマ	講師	出席者数
6月30日	都留は自然の博物館	北垣憲仁 特任教授	21名
8月1日	音楽を楽しもう!	清水雅彦 教授	23名
8月6日	葉脈しおりの入ったしたじきを作ろう!	吉住典子 名誉教授	37名
8月9日	読み聞かせから読書の楽しさを(宝小学校)	日向良和 講師	17名
8月19日	Hello! 英語でワクワク	奥脇奈津美 准教授	28名
10月3日	折り紙を使った算数	寺川宏之 教授	8名
1月6日	読み聞かせから読書の楽しさを(谷二小学校)	日向良和 講師	13名
			合計 147名

当初は、9講座の開催を計画したが、2回の講座を学校行事との重複により中止とした。来年度は、事前に教育委員会を通して、学校行事の開催日との調整が必要である。

なお、講座講師としてご担当して頂いた、奥脇奈津美先生、寺川宏之先生、日向良和先生、清水雅彦先生による詳細な報告が「地域交流センター通信24号」32ページから35ページに掲載されている。

(文責・杉本光司)

(3) 県民コミュニティーカレッジ講座

1. 地域ベース講座

講座名:『健康に役立つ音楽の不思議な力』

講座概要: 音楽はからだ・こころ・そして人々との関わりを健康に変化させる不思議な力を持っています。聴くだけでもさまざまな良い影響を与えますが、自ら歌ったり楽器をさわったりして音楽をすることは健康に直結することなのです。自分から音楽をすることが敷居の高いものだと思いませんか? 音楽療法の音楽には才能も練習する必要もなく、誰もがその場で楽しめる方法と知恵があります。そして音楽に踏み出したその時、誰もがご自分の中に新たな元気と勇気を見出すことでしょう。本講座の中で音楽と親しくなり、ご自分の人生を健康に過ごすために役立てませんか?

会場: 都留文科大学 音楽棟

講師: 清水雅彦(本学初等教育学科教授)、青拓美(本学初等教育学科非常勤講師)

「講座内容」

【第1回】10月5日（土曜日）午後1:00～2:30

講義：「音楽の不思議な力とは何か」

～音楽は人間の身体と心にどのように働きかけるのか？～

受講者：43名

【第2回】10月5日（土曜日）午後2:40～4:10

ワークショップ：「誰もが持っている楽器 声」

～その磨き方と健康への意味～

受講者：43名

【第3回】10月19日（土曜日）午後1:00～2:30

講義とワークショップ：「認知症と音楽療法」

～歌うこと・奏でること～

受講者：30名

【第4回】10月19日（土曜日）午後2:40～4:10

講義とワークショップ：「障がい児と音楽」

～即興演奏の力と意味するもの～

受講者：27名

受講者合計：143名

今回のプログラムは、土曜日の午後を利用した1日2回の講座開催という参加しやすい日程を組んだこと、また、「音楽療法」という自分たちの健康にも関わるテーマにより、これまでにない多くの参加者を迎える事ができました。

参加者から寄せられました感想の一部を紹介したいと思います。

- ・今日の講演を受けて、音楽には様々な力があるということが分かった。歌の歌い方等はもちろんだが、音楽をするためのノウハウを教えてもらい、とても内容の濃い時間を過ごすことができた。将来、音楽を色々な所で役立てることができたら良いと思う。(20代・男性)
- ・友人から、青先生は素晴らしい先生だということを聞いていたので、今回、先生のお話を聞く機会をもて嬉しかったです。「音楽療法」というと、今まで、あまり想像がつかなかったのですが、しっかりあるのだということがわかりました。歌のコーナーも、すごく楽しかったです!!次回も、楽しみにしています。(20代・女性)
- ・音楽療法がどのように使われているのか、どんなものがあるのかが、具体的に分かり、おもしろかったです。特に歌唱についてはどうやって響かせるのかや腹式呼吸のメリットなど、今後自分自身の歌唱にも生かせるヒントをたくさんいただきました。みんなで歌うのもすごく楽しく、「里の秋」は初めて聴いた曲でしたが、とても素敵な曲だなあと思いました。知らない曲にも触れられ、充実した時間を過ごすことができました。ありがとうございました。(20代・女性)
- ・大きな口をあけて唄う人、顔つきだけで表現している人、時には涙をながして感じている人さまざまです。前回の先生のお話をお聞きして、私のやっていることが音楽療法をかすめているのかなという感じをもちました。(80代・男性)
- ・自閉症にもいろいろなタイプがあると思いますが、言葉もなく、ただ、キャツ キャツと奇声をあげ、高所が好きな児童の場合、強いリズムや音に対して、増々、多動になる、静かな音楽を流すと、不思議なくらい静かになって、聴き入る、この症状は自閉になること…?音楽の力って、すごいですね。日常生活の中でも、好きな音楽を聴くことで、泣いたり、笑ったり。特にクラシックの好きな曲はいつまでも聴いていたいし、自閉的傾向かな?集中しすぎる、こだわりすぎる…いろいろ考えることのある講義でした。ありがとうございました。続きを学びたいと思います。

(70代・女性)

- ・実際に体験でき、楽しめました。音楽を通し、キノウの向上等を楽しみながら生活に取り入れていたらと思いました。ありがとうございました。(40代・女性)
- ・初めて参加させて頂いたのですが、とても楽しかったです。音楽療法を担当して、半年経とうとしていますが、それぞれ、違う障害の方…10人10色でどんな音楽療法を自分自身作っていったら良いのか悩んでいました。しかし、今回の講座で楽しみながら訓練を一緒にしていくことで社会性の大きな成長にもつながったり、障害の軽減にもなる、工夫をたくさんしているなあと感じとても参考になりました。ありがとうございました。(20代・女性)

「地域交流センター通信 24号」30・31 ページに、本講座講師の清水雅彦先生と青拓美先生の報告を掲載しておりますので、ご一読頂きたいと思います。

(文責・杉本光司)

(4) 都留文科大学市民公開講座

これまでの市民公開講座は5回開催という日程で実施してきましたが、昨年度平成24年度「県民コミュニティー・カレッジ講座(イギリス文化)」として実施して頂きました、ハイミッシュ・ギリズ先生の熱意により、その継続講座として、本年度は市民公開講座として、初めて、前後半それぞれ5回という全10回講座を下記の内容で開催いたしました。

テーマ：British Culture (イギリスの文化)

開催日：平成25年9月30日(月)～12月16日(月) 全10回

時 間：午後7時～8時30分

会 場：本学2号館2102教室

講 師：Hamish Gilles (ハイミッシュ・ギリズ) 准教授

日程とプログラム

期別	回数	開催日	テ ー マ	出席者数
前半	第1回	9月30日	イギリスの国民性について学びましょう	20名
	第2回	10月7日	イギリスの伝統的な田舎生活について学びましょう	24名
	第3回	10月21日	イギリスの都会生活(特にロンドン)について学びましょう	27名
	第4回	10月28日	イギリスの伝統的な家や家族生活について学びましょう	22名
	第5回	11月11日	イギリスの教育制度や立場や特徴について学びましょう	24名
後半	第6回	11月18日	イギリスの文学について学びましょう	24名
	第7回	11月25日	イギリスのユーモアについて学びましょう	25名
	第8回	12月2日	イギリスの階級制度について学びましょう	22名
	第9回	12月9日	イギリスの王室について学びましょう	19名
	第10回	12月16日	イギリスの伝統的なクリスマスやお正月について学びましょう	20名

講座は、10月から12月にかけての月曜日の夜間（午後7時から8時30分）という開催にも関わらず、出席者数にも表れていますが、熱心な受講生が集まってくれました。高校1年生から80代の方までという非常に幅広い年代の方々が、イギリスの文化における多彩なテーマについて、ギリズ先生の英語（時々日本語）解説に耳を傾け、また、毎回変わるグループメンバーとの会話を楽しんでいました。

講座への登録者数は50名でしたが、前半、後半それぞれの期間に3回以上の受講者には認定証を用意し、前期24名、後期25名にギリズ先生より授与して頂きました。「地域交流センター通信25号」の26ページと27ページには参加者の感想が掲載されておりますので、ご一読頂きたいと思えます。

（文責・杉本光司）

Ⅲ－２．『地域交流センター通信』の発行〔概況と第24・25号〕

1. 本年度の発行の特徴について

本年度も、多くの人の参加と協力によって、24号、25号を発行することができた。発行の基本設計（発行予定日、巻頭文執筆者、特集内容など）は編集会議で検討し、それに基づいて編集小委員会が具体化をすすめている。地域交流研究センター事務職員として本田さんに加え、小林さんが着任したが、編集小委員会には、小林さんがレギュラーとして参加し、25号では特集内容の関係で本田さんにも加わってもらった。お二人の能動的なお仕事ぶりはとくに記しておきたい。

本年度は副編集長を欠いたので、編集小委員会の担当教員は、統括編集者の北垣憲仁さんと編集長の畑の二名であった。

18号から表紙、裏表紙の絵をカラー印刷にできており、さらに22号からは表紙タイトルもカラー化してきているが、本文ページはモノクロでできている。ところが、24号を編集していて、その記事の資料写真がどうしてもカラーである必要が感じられ、臨時措置として裏表紙に本文対応のカラー写真を掲載することにした。カラー印刷の件は、今後は発行の年度計画の段階で判断しておく必要がある。

2月14日の降雪災害に関連し、地域交流研究フォーラム、地域教育相談室公開講座が中止され、それに連動して急きよ25号編集構成を変更する必要が生まれた。俄かな変更は、見開き関係や総ページ数関係で割合むつかしいのであるが、厳しい発行スケジュールのなか、編集小委員会が冷静によく奮闘し、無事に乗り切った。

なお25号で「通信」総目次を掲載することを構想し、早い段階から事務職員を中心に準備を試みてきた。しかし、そもそも「コンテンツ」を掲載するようになったのは20号からであり、総目次掲載で25号分を総観することは簡単でないことが確認され、現段階ではペンディングということになっている。

2. 「通信」記事を取り上げる観点など

A. 「通信」誌面作りの基本的な考え方

「通信」各号の編集の考え方であるが、「特集」と「トピックス」の二つを構成原理にしている。また地域交流研究センター事業（共催を含む）は、そのすべてを可能な限り誌面で紹介し、記録していくよう配慮している。その場合、次のような判断をしてくている。

- 1) 市民公開講座や南都留地域教育フォーラム、などなどの講座やフォーラムの諸事業は直近の号で必ず掲載してきている。また「地域交流研究教育プロジェクト」の事業、授業科目「地域交流研究」、「地域貢献活動」も、適切に報告・紹介をするようにしている。
- 2) フィールド・ミュージアム部門や発達援助部門などの継続的な諸実践は、間歇的に取り上げている。

つまり個々の実践は、特集の組み方によって、「特集」記事になったり、「トピックス」欄に入ったりすることとなる。

また「通信」20号で「地域・故郷を思う—東日本大震災と私たち—」を特集したが、「3・11」がもつ重大性に鑑み、それ以降の号で「特集」（的なもの）を継続しようとしてきている。

B. 「特集」の組み方

地域交流研究センターの三つの部門（「フィールド・ミュージアム部門」「発達援助部門」「暮らしと仕事部門」）の事業を順番に特集化していくことを基本原理にしている。「通信」は年二回の発行体制でできているから、同一の部門が特集となるのは、一年間置いてということになる。

実際は部門活動の実状を反映させ、できるだけ生き生きとした特集を組めるように判断していくことになる。また「特集」は、部門活動とは独立な主題で編成することも行なっている。したがって三部門を回転させていくことは、特集計画の基部の発想として生かしているということである。このことは、とくに編集長が中期的な発行イメージを構想し、関連担当者たちと事前に意見交換していく上で大事なことになる。

なお、都留文科大学の地域交流研究センター（関連）の諸実践は相当に豊かなものとして展開・継続されており、したがって「通信」の一つの号の特集は、特集1から特集3まで、臨機応変に設定してきている。その設定の着想が、私たちのセンター事業の理解を深くしていくことにつながっていく。

C. リード文などの重要性について

「通信」は年2回発行してきているから、掲載する実践の対象・領域は繰り返し光を当てることになる。けれども大学における地域交流は、対象も視点も開拓していくべき探究的テーマであり、地域交流「研究」センターなのである。実践のやりっぱなしではなく、私たち当事者が自らの実践の意味を注意深く吟味し続け、新たな可能性を見出していこうとしている。そのことはさまざまな機会をとおして行われていくことになるが、「通信」の継続的な発行もその大事な機会の一つである。とくに特集の設定は、編集会議で共同討論の過程を経るも

のであり、その特集の趣旨を表明するリード文は、短くてもセンターとしての重要な「試論」の意味を帯びている。

同様に、個別の実践紹介にもリード文が付されていることが多いが、その実践の経緯など、重要なメッセージをもっている。

D. 実践事業への参加者の感想

「通信」記事の多くは、主催者に拠るものではなく、参加者の感想という表現形式をとっている。その方が読み物として面白いということもあるが、参加者自身の感想ということで実践の実質が深くイメージされてくる、という特徴がある。同時に、多くの参加者に執筆してもらふことにより、「通信」自体を交流の広場にしていこう、という趣旨をもっている。

E. 関連資料などの紹介

都留文科大学地域交流研究センターは、すでに述べたように、交流実践と専門学術研究、そして教育の在り方にかかわる思想的問いを含んでスタートし、今日にきている。いわば自ら「仮説」をたてながら、センター像の模索を持続してきていると言ってよい。その共同考察の手がかりとなる「資料」も、さまざまに「通信」に掲載してきている。このような「理念」への関心、問いかけは、センターという共同事業を発展・深化させていく上で不可欠である。

F. 「通信」の役割

上述のことを念頭に置き、「通信」が果たしている役割について仮説的にまとめてみると次のようになる。

- 1) 編集準備過程で実践担当者と意見を交わしていくので、地域交流実践関連情報を交流し共有していく機能をもっている。
- 2) 大学の地域交流実践の「記録化」の役割をもつ。
- 3) 地域交流の諸実践を総観する可能性をもち、したがって学内外に対する地域交流研究センターの「広報」としての意味をもっている。
- 4) 記事として表現し、編集していく営みが、自ずと、大学における地域交流の「研究」活動にもなっている。
- 5) 主催者のみならず、多くの事業参加者に執筆してもらっており、「通信」自体が「交流広場」の役割を果たしている。

「通信」がもっている意味については、これからも広く検討していくべきテーマである。なお、「通信」16号、17号に掲載した大田堯氏のインタビュー記事「見沼フィールド・ミュージアムを呼びかける」は、発行当時より広く読まれたが、それが大田堯自撰集成（藤原書店）第3巻（2014年4月30日）に収録された。

3. 発行日とページ数

第 24 号は、2013 年 12 月 4 日に発行した。40 ページである。

第 25 号は、2014 年 3 月 18 日に発行した。32 ページである。

4. 各号の編集内容と読者の声

【24 号】

巻頭文は、本学名誉教授の近藤幹雄氏にお願いした。近藤先生は都留市立都留短期大学の創設のときから、専任教員として都留文科大学の発展を支えてこられ、大学の歴史の証言者として貴重な存在である。地方公立大学としての都留文科大学は、国立大学の成立史とは異なる独特の成り立ちをもっており、その成立史と関わって大学の地域交流というものを考えていくことは、共有されるべき大事な観点というべきだろう。

特集 1 は「大学と地域をミュージアムとして市民と共有する」とした。都留の地では、環境生態学の今泉吉晴氏を中心に「ムリネモ」（ムササビ、リス、ネズミ、モグラ）観察の森づくりの実践が重ねられてきており、地域交流研究センターは、その理論・実践を重要な素地の一つとして、内容づくりを進めてきた。新図書館前ビオトープの建設がその重要な結節点であることを、平成 13 年 10 月 10 日の教授会議案を通して想起し、①学生・教員たちが地域のゆたかなフィールドに注目しさまざまに学んできていること、②キャンパスを地域のフィールド・ミュージアムと一体的なものとして大事に育もうとしてきていること、③地域とキャンパスのフィールドを、学生・職員・教員と地域子どもたち・市民との共有のものとし交流を重ねてきていること、などに光を当てようとした。（特集 1 リード文参照。）編集していて、その実践の多彩な展開に改めて驚かされる。

特集 2 の「地域・故郷を思う—東日本大震災と私たち—」は、シリーズとして意識しているものである。本学関係者による被災状況調査は、私たち大学人が専門領域を超えて知り合っておくべきものだろう。

特集 3 は「出会いを生み喜びを引き出す公開講座」とした。公開講座は大学と地域社会とを結ぶもっとも基本的なものであり、その充実度がよく伝わってくる。また公開講座というものは、日本の大学史の脈絡でも意識されるべきであり、そのことを資料（都留文科大学の「夏期大学」の記録）から考えようとした。

【25 号】

巻頭文は、本誌の読者でもある和歌山大学学長の山本健慈氏にお願いした。山本氏は和歌山大学生涯学習教育研究センター長なども歴任されており、大学の地域交流に関する専門的知見をゆたかにもっておられる。山本氏は「大学の地域参加と住民の学習」と題し、「〈学〉の側において、“学問の自由”という原理が大切にされているように、相対する〈地〉の側にも“住民の学習の自由”、“意見表明の自由”というものが保障されなければ、〈地・学〉の共同は成り立たないのです。」と述べていますが、この観点は地域交流実践において共有され

ていくべきでしょう。

特集1「動き始めた『都留市まちづくり交流センター』」は、「都留市まちづくり交流センター」の設立経緯・趣旨、主要な担い手からのメッセージ、いくつかの実践の試み、という三つの側面から構成し、その出発を伝えようとした。地域交流研究センターもサテライトを置いて参加しており、これからも適宜光を当てていくことになるだろう。

なお2月14日の降雪災害の経験のことを、サテライトに位置づいている本田祐士さんの臨機応変の判断で、記事として伝えることができた。

特集2は、「9年目を迎えた地域交流研究センターの講義科目『地域交流研究』」とした。すでに9年の歴史を経ているが、その「Ⅱ」「Ⅲ」「Ⅳ」それぞれに、学生たちの学びの意欲への迫り方として、貴重な方法を開拓していることが伝わってくる。

特集3の「南都留地域教育フォーラムと美術教室」は、やや独特の括りとなっているが、美術教室の教員たちが、学生たちを指導しながら地域交流の表現活動に積極的に挑戦していることに光を当てようとした。

なお「特集」にはならなかったが、『100,000年後の安全』上映会を、「地域・故郷を思う―東日本大震災と私たち―」の「シリーズ」(6)として掲載した。



【読者の反響】

「通信」の読者からは、たくさんの感想が寄せられている。その中のいくつかを抜粋して掲載する。

- ・「地域交流センター通信」そのものが、執筆参加者にとっても、読者にとっても、情報交換の場であり、地域からも、学舎からも学ぶ場でもあります。
- 大学側、大学生の観点のみならず、市民（大人も子どもも）サイドの視点・観点も一緒に双方が認知することができ、大学だけでは把握しきれない地域社会の存在を在学中に知ることができ、一方

市民も地域社会の常識や通念とは異なる概念を勉強する機会に恵まれます。双方とも 1 + 1 = 3 の世界を認知することができる環境が保障されています。「地域交流センター通信」の存在意義は確かなものがあります。

もう一つ、都留文科大学の地理的に誇れるのは、自然空間が広いし山々の数が多いし、きれいな水の流れる川があることです。学生も、地域の若い人も、自分が主体性をもち、求めるものを引き出す環境にあることだと思います。都留市では、市民にとっても学生にとっても、何が生活の手段かを知り、社会の成り立ちの基本を認識することで、将来の自分に役立っていくと思います。

学生も市民もお互いに触発される内容が盛りたくさんあり、そうやって「地域交流センター通信」はその存在感を示してきたように思います。「地域交流センター通信」は、大学のみならず、地域にも大きく貢献してきたと言えましょう。(芸術家、東京都)

- いつも貴重な情報・資料をお届けくださり、ほんとうにありがとうございます。毎号を楽しみにしています。とても参考になりますし、大学人としての役割の果たし方を学ぶことが多いです。(大学教員、東京都)
- とくに「通信」25号を読みますと、地域交流研究センターの息吹、講義科目「地域交流研究」の意欲的な取り組みなど、みなさんの確かな共同作業が行きとどいていることを実感させられます。私もF大学で公開講座、地域研究センター長などを担当しましたが、“言うは易く行うは難し”を体験しています。(元大学教員、東京都)
- 「地域交流センター通信」をずっと送ってくださって、ありがとうございます。地方の小さな大学が地域の中で果たしてきた役割はとても大きなものだと思います。信州でも長野大学や松本大学は地域で一定の役割を担っていますが、都留文大はその先進校になっているように思います。これだけの通信を出し続けている努力に敬意を表します。(元市長、長野県)
- いつも「地域交流センター通信」をお送り頂き、ありがとうございます。小さな冊子を手にとると、何となくほっとした気持ちになるとともに、大学教育のあるべき方向性をいつも教えて頂いておりました。(大学教員、東京都)
- この間「大学と地域をミュージアムとして市民と共有する」理念を貫いて実践されてきたことを思うと、まことに感慨深いものがあります。「地域交流センター通信」のもつしなやかで香り高い誌面が、これからも続いていくことを期待しています。(元大学教員、茨城県)

5. 2014年度発行に向けて

昨年度の『地域交流研究』の「5. 2013年度に向けて—課題と来年度の発行予定—」に記した事項は、ほぼ本年度も該当する。

- 1) 「コミホの防音の課題と新たな地域センター施設」という問題は、解決されないままであり、本年度も音楽系サークル利用による音の「迷惑」により編集作業が停滞することになった。
- 2) 本年度は副編集長不在のまま編集作業を進めざるを得なかったが、冒頭でも記したように担当事務職員の充実したサポートがあり、何とか無事に2号分を発行することができた。なお、長く編集長を務めてきた畑が本年度をもって退職するので、来年度は編集長、副編集長の人材見通しをもつことが大きな課題となる。

参考までに記しておく、畑の研究分野は社会教育であり、地域交流研究センター活動に研究的関心をもって編集に臨むことができた。また畑は部門の一つ「フィールド・ミュージアム部門」に属しており、いつもセンターの実践に直接触れて編集アイデアを温めるこ

とができていた。「2.「通信」記事を取り上げる観点など」で述べたように「通信」の役割は多面的であり、能動的に役割を担う人材が期待されている。

- 3)「1. 本年度の発行の特徴について」でも述べたが、「総目次」をもつという課題がある。このことは、ただ「総観する」というだけではなく、記事検索の可能性をつくるということでもある。編集イメージを構成していくときに、過去の記事との関連を確認する必要があるが、このことは、すでに記憶だけでは無理になってきており、バックナンバーを繰り返しめくる作業をしている。今後、何らかの検索を可能にする実際的な方法を検討していくべきだろう。

地域交流研究センターの活動を広く共有し個々の実践を深めていく上で、「通信」が果たしていく役割は小さくないだろう。「通信」の発行を持続させる苦勞を通して、その可能性を開拓していくことが期待されている。

(文責・畑 潤)

Ⅲ－3. 学部共通科目の開講

(1)「地域交流研究Ⅱ」－生きもの地図を作る－

地域交流研究Ⅱの授業では、2011年より前期に「生きもの地図を作る」をテーマにして、身近に見られる生きものの分布調査を実施している。定量的な調査をおこなうことで、季節の変化にともなう生きものの動態を把握し、ここで得られた情報を地域に公開する手法を学び、生きもの地図が地域交流に果たす役割を考察することが授業の目的である。調査対象は受講生の人数により年によって若干異なるが、2013年はタンポポ、12種の樹木、ツバメ、イワツバメ、カラス類、昆虫を対象に調査を実施した。

例年、受講生自身が決めた調査対象について、2～8名ほどのグループにわかれて調査をしている。調査のさいには事前に用意した簡易図鑑を配布し、生きものに詳しくない学生にもデータが取れるように配慮している。生きもの地図を作るにあたっては、対象とした種の識別とその生きものがいつ、どこに、どのくらいあったのかを把握することが重要になる。そのため、調査対象の種を正確に識別し、記録することが求められる。また、この授業では野外に出て調査をすることに重きを置いている。生きものに関する知識は、本やインターネットを介して、室内に居ながらにして触れることができるが、自分の足を使って得た情報はとても大事で、直接的な多くの学びはこのような経験のなかにあると考えるからである。受講した学生には、大学周辺の身近な自然に触れ、その意味を考える時間を持ってもらいたいと願っている。

調査をおこなった後はまとめをして、グループごとに1枚のパネルを作っている。ここで作製したパネルは、都留文科大学前駅の待合室に展示し、その成果を広く公開することに努めた。調査、まとめ、パネル作製という一連の作業をこなすことで、受講生からは「授業で調査をしたことから楽山公園をよく歩くようになった」、「これまでよりも意識して花を探

すようになった」という感想が寄せられた。つまり、授業を通して生きものの調査をしたことで、日常の生活においても身近な自然に目を向けるようになったことが示唆される。こうした意識の変化があったのも、何度も調査を重ねたからであろう。

経年的に蓄積される生きもののデータをどのように管理し、利用していくのか、そのシステムをどうやって作っていくのかが今後の課題として考えられる。

また、受講生の人数が2011年は77名、2012年は106名、2013年は94名と比較的多いことから、「学生便覧」に記載されている地域交流研究の授業のイメージを実践するのは困難である。次年度は受講生の人数調整をおこなう必要があるかも知れない。

(文責・「地域交流研究Ⅱ」担当 西 教生)



2013年の授業におけるパネル作製の様子

(2) 「地域交流研究Ⅲ」－「山梨」を知り、歩き、知らせる－

この科目は、山梨県観光部における「やまなし観光カレッジ事業」との提携により、表に示すように、県内各分野の第一線で活躍している方を講師に招いての10回の講座、土曜日開催の2回のフィールド・ワーク、そして1回以上のイベント・ボランティア参加という3つの要素から構成されています。

☆講 座

日 程	テ ー マ	講 師	備 考
2013/10/10(木)	山梨と富士山	白石 浩隆	ひめねずみ社
2013/10/17(木)	山梨県の概要と観光振興	観光部職員4名	山梨県観光部
2013/10/24(木)	山梨の歴史	堀内 真	山梨県立博物館
2013/11/7(木)	郡内織物の新しい挑戦	前田 市郎	甲斐絹座(前田源商店)取締役
2013/11/14(木)	甲州印傳	上原 勇七	榎印傳屋上原 会長
2013/11/21(木)	山梨の果実	堀内 圓	甲斐いちのみや金桜園 社長
2013/11/28(木)	山梨のワイン	長谷部 賢	長谷部酒店 勝沼食堂Papasolotte
2013/12/5(木)	地域活性	赤松 智志	富士吉田 地域おこし協力隊
2013/12/12(木)	山梨の方言『Can you speak 甲州弁?』	五緒川津平太	作家(本名:大堀 卓)
2013/12/19(木)	都留市の魅力	依田 博江	都留市役所 産業観光課

☆フィールド・ワーク

日 程	方 面	視 察 先
11月9日(土)	郡内地域	富士吉田市歴史民俗博物館、山梨県立富士ビジターセンター、フジヤマミュージアム、富士浅間神社、尾県郷土資料館
11月30日(土)	国中地域	かいてらす、山梨県立博物館、大日影トンネル、シャトー勝沼

山梨県知事発行の修了認定証を受け取るためには、①7回以上の講座出席、②1回以上のフィールド・ワーク参加、③1回以上のイベント・ボランティア参加、④山梨県観光行政に対する提案レポート提出、という4つの条件をクリアしなければなりません。今年度は受講者135名という中、修了認定者が105名というこれまでにない人数となりました。受講のきっかけも先輩から薦められたという声も多く、この講座が着実に浸透しているようです。毎回の講座でも気になったことばや感想を提出してもらい、それを講師の方にお送りしております。

講座だけでなく、実際に現場に出かけて行き、その魅力に触れる機会として2回のフィールド・ワークを実施しています。今年度は、上記一覧にあるとおりのコースで実施しました。ここではミニ・レポートとして視察先に応じた設問が用意され、一日の感想も記入して提出します。

1月29日には、「山梨魅力メッセンジャー事業」との連携講座時代も含め、最多の人数となりました「やまなし観光カレッジ」修了認定者105名に対して認定証授与式が開催されました。しかし、これで、めでたく「地域交流研究Ⅲ」も成績認定となるわけではなく、更に学内での課題レポートの提出が義務付けられ、最終的な成績認定者となります。

このフィールド・ワークへの参加者の感想も含め、「地域交流センター通信25号」18ページから19ページに掲載されています。

(文責・「地域交流研究Ⅲ」担当 杉本光司)

(3) 「地域交流研究Ⅳ」—地域の交流誌をつくる—

1. 授業のテーマと構成

地域交流研究Ⅳは、地域での実地の学びを冊子の編集を通して多くの人と共有することを目的とした授業である。フィールド・ミュージアム部門（以下、部門と記す）のテーマでもある「人と自然との交流」を本授業のテーマとしている。そして部門で実践してきた『フィールド・ノート』の経験を活かし、記事の編集など実践的な授業を心がけてきた。

本年度で7年目となる本授業では、①「地域の人と自然との交流」をテーマに、学生が自ら記事にしたい企画を立てる。②じっさいに地域に出て企画に沿った取材を行なう。③地域での経験を記事にする（約2000字）。④グループで各自の記事を読み合い、感想を述べ合う。⑤グループでの読み合いをもとに記事を校正する。⑥冊子作成に向けて写真などの配置を含めた編集作業を行なう。⑦完成した記事の製本作業（『Color』と題して発行）。⑧完成した記事を全員で読み合い、感想を述べる。⑨取材先、お世話になったかたがたに冊子を配布し、感想を伺う。⑩一連の作業を通して、冊子編集のプロセスが地域との交流に果たす役割を考察する、という構成にした。①～⑩の項目に1～2時間を充てた。

このような実践的な授業構成では、大人数の受講者には対応できない。したがって、シラバスにはあらかじめ少人数のゼミ形式を想定する、と明記し、ガイダンスでもその旨を説明

した。

2. 授業を終えて

本授業が終わってからのレポートには、次のような感想が記されていた。

「生き方に迷っていたが、じっさいに地域で生きている人の話に励まされた」(社会学科1年生)

「くりかえして校正することで自分の経験した意味がはっきりしていくのが感じられた」

(比較文化学科2年生)

「こんな人を目指したいという人に出会って直接話が聞けたのが嬉しい」(英文学科1年生)

「人の体験をみんなで読むことで、地域のおもしろさが広く理解できるようになった」

(英文学科2年生)

本授業では、「地域をもっと知りたい」という動機で受講を希望した学生が多かった。授業の最後に提出されたレポートに、半期という短期間に、地域の人びととじっさいに会い、話を伺い、励ましの言葉をかけられたことが嬉しかったと記した学生が少なくない。地域の人びとからの励ましが、記事を書きたいという動機に繋がっているようである。聞き取った内容を言語化し、それをグループで読み合う作業は、自分とは異なる体験を共有すると同時に、他者からの感想や指摘を受けて自らの体験の意味を考え直す契機となる。そのようにして地域で体験したことの理解が深まってゆく。それは受講生の仕上げた記事が、校正のたびに描写も体験の内容も具体的に記されていくようになることから見て取れる。

一口に地域を知ると言っても、すべてを短期間に知ることはできない。また体験の理解も、言語化しそれを何度も校正していくことで練り直され深まっていく。地域の理解には、地域の「もの」を多様に見て周囲の人と共有していくことが必要だろう。そうした意味からも、本授業は地域を知るための役割をささやかながら果たしていると思われる。

本授業は、部門の『フィールド・ノート』の実践をもとに展開している。だが、半期の授業で企画の立案から冊子の編集までを目指す授業展開が早くなり、学生への丁寧な対応ができない。地域を学ぶより効果的な内容をどのように作り、時間をかけた丁寧な対応をどのようにしていけばよいかは今後の課題である。完成した冊子『Color』を読んだ地域のかたがたの感想を伺える時間をつくることができれば、冊子編集が地域交流に果たす役割をより具体的に検討していくうえでより効果的だろう。その時間を確保していくためにはどのような授業の構成にしていけばよいかも、今後、課題として改善していきたい。

(文責・「地域交流研究Ⅳ」担当 北垣憲仁)



授業で学生が取材し編集した冊子『Color』

IV. 地域貢献活動

IV-1. 山梨県地域教育フォーラム南都留集会

本学は「南都留地域教育推進連絡協議会」の構成員であり、毎年晩秋に開催される「山梨県南都留地域教育フォーラム」では、各分科会の助言者として本学教員が参加・協力してきている。本センター設置以後は、センターが人選・依頼・派遣を担当する形をとっている。

本年度（平成25年度）は10月31日（木）、富士吉田市立下吉田第二小学校を会場に「子どもたちの教育は地域全体で担う」～みんなで育む地域連携・地域交流～と題して、第16回目の集会在開催された。日程については、本学教員が参加しやすい桂川祭期間中の開催を配慮していただいている。

今回の第16回集会は、下に示すような7つの常設分科会が設置され、それぞれ2本程度の実践レポートをめぐって検討・討議がおこなわれた。本学からは、助言者として、第1分科会に筒井潤子（初等教育学科）、第2分科会に鳥原正敏（初等教育学科）、第3分科会に西本勝美（初等教育学科）、第4分科会に鶴田清司（初等教育学科）、第5分科会に田中昌弥（初等教育学科）、第7分科会に杉本光司（情報センター）と、6つの分科会に本学教員を充てることのできた。特に、鳥原正敏先生には、第2分科会において、「デジタルデータベースを使った図画工作のあらたな試み」と題して、旭小学校における「たからぼこ作戦」の実践を通じた取り組みについて、発表者の特任准教授の館山拓人氏と図工・美術ゼミ生による実践報告のサポートも含め参加頂くことができ、鶴田清司先生とともに初参加ということでしたが、お二人からも非常に良い経験が出来たとの感想も寄せられ、これからも地域貢献活動に対して、他の教員の参加が望まれる。

- | |
|--|
| 第1分科会：幼稚園・保育園・小学校部会 …「滑らかな接続のために」 |
| 第2分科会：小学校・中学校部会 ……………「ネットワーク作りと活用」 |
| 第3分科会：中学校・高校部会 ……………「地域が持っている力を生かして」 |
| 第4分科会：小・中・高児童生徒部会 ……………「子どもの思いをつなぐ」 |
| 第5分科会：行政・地域団体・学校部会 ……「地域から子どもへ、子どもから地域へ」 |
| 第6分科会：特別支援教育部会 ……………「成長を支える連携」 |
| 第7分科会：PTA部会 ……………「子どもと地域をつなぐ」 |

本集会は、構成員・構成団体が官民含めてきわめて多岐に渡り、「地域教育」（地域の子どもは地域で育てる）をトータルに推進していくうえで大きな可能性を有している。したがって、本集会への協力は、本学が都留市のみならず、南都留という、より広域の諸学校・諸機関との連携を実施していくうえで貴重なネットワークづくりの一環となり得る。ただし、毎年の集会の設定では、レポートの依頼や各分科会のテーマ・柱立てなど十分に手が回らない状況のようである。ここ数年、本学教員が特定の分科会に継続的に関わり、テーマ設定やレポートの発掘の段階から協力し、それぞれの分科会が経年的に研究を蓄積できるような体制をつくれなかと事務局（富士・東部教育事務所地域教育支援担当）と意見交換もしているが、

実現は難しいようである。

この点で、8年前から、集会に先立つ10月中旬に、分科会毎にレポーターおよび役員と、本学からの助言者が事前に打ち合わせをおこなう機会を設定していただいたのであるが、主催者側、本学教員側の双方から好評であり、連携が一步進められたと言えよう。また、分科会によっては継続的に関わりを持つ教員も出てきている。

今年度も、教育に関心を持たれている多くの分野の方々が南都留地域から約300名以上も集まり、全体集会、その後の分科会へと積極的に参加し、それぞれの提案に対しても熱心に質問をおこなうなど、確実に、地域の恒例フォーラムとして認知されているように感じた。

事後に事務局がまとめたアンケートによると、各分科会参加者の満足度はきわめて高く、とりわけ助言者の発言や役割を高く評価する回答が目立った。このような形での本学教員の「地域教育」への貢献が切実に求められており、実際に、本学教員が果たせる役割が大きいことを再認識させる結果であった。引き続き、事務局との連携を密にしながら、より発展的な協同のあり方を追求したい。

なお、主催団体である南都留地域教育推進連絡協議会と富士・東部教育事務所より、平成24年度と25年度のフォーラムの内容も含めた「南都留の地域連携・地域交流」VOL.6が発行されている。

(文責・杉本光司)

IV-2. 都留市放課後子ども教室事業

1. 「放課後子ども教室」事業について

本事業は、文部科学省の「子どもの居場所づくり事業」（平成16年度）および「地域教育力再生プラン」（平成17・18年度）を発展的に引き継ぎ、都留市子ども教育連絡協議会を推進主体として、都留市教育委員会学びのまちづくり課生涯学習担当が事務局を担って実施している事業である。「学校の体育館やグラウンド、図書室等に安全・安心に活動できる拠点を設け、地域の住民、大学生、社会教育関係者などを活動指導員として配置し、小中学生を対象とした放課後や週末などにおける遊び、スポーツ、体験活動、学習支援などの様々な活動を行う」もの。本学の学生には学生指導員としての協力・活動が期待されており、平成16年度から20年度までの5年間は、本学教員の西本勝美（初等教育学科）が、21年度からは杉本光司（情報センター）が大学側のコーディネーターとして、「都留市子ども教育連絡協議会委員」として担当している。なお、平成19年度より、市町村が費用の3分の1を負担することとなり、県下の多くの類似事業が廃止となるなかで、都留市がいちはやく事業の継続と費用負担を決定したことは特筆に値し、平成21年度からは、福祉課が担当する「放課後児童クラブ」（学童保育）事業との連携も開始されたことにより、4地区（東桂、宝、谷村第二、旭の各小学校区）のみでなく、市内全地区への拡大を希望する声も多い。

学生指導員の活動の中心は「遊び」と「読書と学習支援」であるが、4地区の住民の協力

体制が整ってきたこともあって、当初に比べて学生指導員の要請が回数、人数ともに若干減少する傾向にある。また、各小学校が体育館やグラウンドを開放できる日時が、本学学生が参加しやすい日時と一致しない平日の場合もあり、学生が多数参加できる日時の設定となるよう、事務局にはたびたび意見を出している。

そうした日時の制約にもかかわらず、今年度も積極的に参加する学生がおり、リピーター学生が少なくない状況からも学生たちに高い評価を得ている結果としてとらえることができる。また、市側のコーディネーターからも、学生の活動への高い評価をいただいている。学生にとってはささやかな取り組みではあるが、3年次以降の教育実習や「学校参加（SAT）」とはひと味違った、より気軽に子どもたちと接する機会が持てる2年次推奨の活動として定着しつつある。都留市内の小中学校と本学とのつながりを太く、豊かなものにしていくうえで、本事業の継続と発展は重要な一環を占めることになるだろう。

2. 今年度の活動状況

前年度に引き続き、東桂、宝、谷村第二、旭の4小学校区において、各地域協働のまちづくり推進会などの協力を得て放課後子ども教室が実施された。小学校のグラウンドや体育館、公民館などの小学校周辺の公共施設、野外などにおいて、遊び、自然・農業体験活動、料理、文化的活動、ものづくり活動、その他特別活動や交流活動が実施された。

教室名 (開始年度)	実施回数	延べ参加者数 (登録者数)	延べ指導員数 (学生含む)	主な活動内容
桂子ども教室 (H16～)	44回	738人 (166人)	228人	<ul style="list-style-type: none"> ・遊び(スポーツ、昔の遊び、など) ・自然体験(野菜作り、山歩き、釣りなど) ・ものづくり(手芸、陶芸、工作など) ・料理(収穫した野菜を使った料理、もちつき、お菓子作りなど) ・その他(絵画、将棋、囲碁、書道、学習支援、ボランティア活動、公開講座など)
宝っ子クラブ 七里 (H18～)	41回	376人 (51人)	191人	
三吉子ども 体験教室 (H18～)	39回	474人 (49人)	151人	
旭子ども教室 (H19～)	39回	739人 (72人)	219人	

本年度(平成25年度)は、東桂小、谷二小、宝小、旭小の4拠点校から、年間で計44回・80名の学生指導員派遣の要請があったのに対し、計38回(20年度:34回、21年度:59回、22年度:56回、23年度:28回、24年度:40回)、延べ62名(20年度:52名、21年度:90名、22年度:97名、23年度:40名、24年度:60名)の学生を派遣することができた。昨年度に引き続き本年度にも連続して積極的に参加してくれた学生もいた。参加プログラムと学生たちの応募の状況は次の通りである。

2013年度「放課後子ども教室」 学生スタッフ応募状況

No	日程	活動内容	集合場所	時間	定員	応募者数	過不足
1	6月 8日(土)	自然体験 さつまいも植付自然散策	東桂小 野外(畑)	9:00~11:30	1	3	2
2	6月12日(水)	遊び フットサル	谷二小 グラウンド・体育館	15:00~16:30	4	-	-4
3	6月26日(水)	遊び フットサル	旭 小 グラウンド・体育館	14:50~16:30	4	1	-3
4	7月 3日(水)	遊び おにごっこ(1.2年生)	東桂小 グラウンド	15:00~16:30	3	2	-1
5	7月 3日(水)	農業体験 きゅうりの収穫	谷二小 畑	15:00~16:30	2	1	-1
6	7月 6日(土)	自然 釣り	谷二小 菅野川	8:30~12:00	2	6	4
7	7月13日(土)	自然体験 鹿留自然散策	東桂小 野外(畑)	9:00~11:30	1	5	4
8	7月14日(日)	自然 河川清掃	谷二小 菅野川	9:00~11:00	2	3	1
9	7月17日(水)	遊び 球技(3.4年生)	東桂小 グラウンド	15:00~16:30	3	1	-2
10	7月24日(水)	農業体験 きゅうりの収穫	谷二小 畑	9:00~11:00	2	2	-
11	7月25日(木)	学習支援 読書・学習支援	宝 小 多目的ホール	9:30~11:00	1	1	-
12	7月25日(木)	読書・学習 夏休みの友・課題プリント	旭 小 旭小図書館	10:00~11:30	1	1	-
13	7月25日(木)	読書・学習 夏休みの友・課題プリント	谷二小 図書室	10:00~11:30	1	2	1
14	7月26日(金)	読書・学習 夏休みの友・課題プリント	旭 小 旭小図書館	10:00~11:30	1	2	1
15	7月26日(金)	読書・学習 夏休みの友・課題プリント	谷二小 図書室	10:00~11:30	1	1	-
16	7月31日(水)	ものづくり 木工工作	旭 小 公民館	9:00~11:30	2	2	-
17	8月 7日(水)	遊び 将棋	谷二小 多目的ホール	10:00~11:30	2	3	1
18	8月 8日(木)	遊び 将棋	谷二小 多目的ホール	10:00~11:30	2	1	-1
19	8月 9日(金)	ものづくり ペットボトル工作	東桂小 コミュニティー	9:30~11:30	2	1	-1
20	8月 9日(金)	農業体験 花の収穫、被災地に送る準備	谷二小 畑	8:30~10:00	2	3	1
21	8月20日(火)	ものづくり 木工工作	谷二小 図工室	9:00~11:30	2	3	1
22	8月31日(土)	自然体験 種まき、探り掘り	東桂小 畑	9:00~11:30	1	1	-
23	9月25日(水)	遊び なわとび遊び	東桂小 グラウンド	15:00~16:30	3	-	-3
24	11月 2日(土)	自然体験 収穫	東桂小 野外(畑)	9:30~11:30	1	2	1
25	10月16日(水)	ものづくり 木工工作	旭 小 営農指導センター	15:00~16:30	2	2	-
26	10月27日(日)	自然 河川清掃	谷二小 菅野川	9:00~11:00	2	5	3
27	10月20日(日)	自然 山歩き	旭 小 山	9:00~12:30	2	2	-
28	10月23日(水)	遊び ドッジボール	旭 小 営農指導センター	15:00~16:30	2	2	-
29	10月30日(水)	遊び グランドゴルフ	谷二小 グラウンド・体育館	15:00~16:30	3	1	-2
30	11月 6日(水)	遊び ダンス	東桂小 体育館	15:00~16:30	3	3	-
31	11月20日(水)	自然体験 初冬の自然探検	東桂小 野外	9:30~11:30	1	-	-1
32	12月26日(木)	学習支援 読書・学習支援	宝 小 多目的ホール	13:00~14:30	1	1	-
33	12月26日(木)	読書・学習 冬休みの友・課題プリント	旭 小 旭小図書館	10:00~11:30	1	1	-
34	12月26日(木)	読書・学習 冬休みの友・課題プリント	谷二小 図書室	10:00~11:30	1	2	1
35	12月27日(金)	読書・学習 冬休みの友・課題プリント	旭 小 旭小図書館	10:00~11:30	1	1	-
36	12月27日(金)	読書・学習 冬休みの友・課題プリント	谷二小 図書室	10:00~11:30	1	2	1
37	1月 7日(火)	ものづくり わりばし工作	東桂小 コミュニティー	9:30~11:30	2	2	-
38	1月 7日(火)	遊び 凧を作って、凧あげをしよう	谷二小 図工室・グラウンド	9:30~11:30	2	2	-
39	1月 8日(水)	ものづくり 凧づくり	宝 小 多目的ホール	13:00~15:00	2	2	-
40	1月 9日(木)	遊び 昔の遊び	東桂小 コミュニティー	13:30~15:00	2	-	-2
41	1月15日(水)	遊び 正月遊び、かるた	谷二小 多目的ホール	15:00~16:30	2	1	-1
42	1月22日(水)	遊び 正月遊び・かるた	旭 小 営農指導センター	15:00~16:30	1	1	-
43	1月23日(水)	遊び 正月遊び・かるた	旭 小 公民館	14:50~16:30	1	-	-1
44	2月 5日(水)	遊び 昔の遊び	谷二小 多目的ホール	15:00~16:30	2	-	-2
活動総数：44 定員数合計：80 応募総数：77 登録学年数：26							

※上記一覧ほか年度中に都留市教育委員会から、日程変更4件・活動中止2件・活動追加3件(5名)・増員4件(4名)の変更依頼がありました。

3. 放課後児童健全育成事業（放課後児童クラブ＝学童保育）との連携について

平成 21 年度からは、全 4 教室において、学童保育の子どもたちにも「放課後子ども教室」への参加を積極的に呼び掛け、学童保育を実施していない日（日曜日など）にも、一緒に活動できる居場所として「放課後子ども教室」を開催し連携を図った。

4. 大学主催の市民公開講座との連携

昨年度（平成 24 年度）より、市民公開講座と連携した子ども向け講座として、今年度からは、名称を「子ども公開講座」として位置づけて下記の通り 7 講座を開講した。（本年報 III. インターフェイスとメディアの活動のⅢ－1（2）都留文科大学子ども公開講座に詳細を掲載している。）

開催日	テ ー マ	講 師	出席者数
6月30日	都留は自然の博物館	北垣憲仁 特任教授	21名
8月1日	音楽を楽しもう！	清水雅彦 教授	23名
8月6日	葉脈しおりの入ったしたじきを作ろう！	吉住典子 名誉教授	37名
8月9日	読み聞かせから読書の楽しさを（宝小学校）	日向良和 講師	17名
8月19日	Hello！ 英語でワクワク	奥脇奈津美 准教授	28名
10月3日	折り紙を使った算数	寺川宏之 教授	8名
1月6日	読み聞かせから読書の楽しさを（谷二小学校）	日向良和 講師	13名
			合計 147名

（文責・杉本光司）

Ⅳ－3. 文大ボランティアひろば

1. 「文大ボランティアひろば」とは

本事業は、平成 20 年度に開始された取り組みである。平成 20 年 5 月に、都留市社会福祉協議会の森嶋美子氏と、西本勝美地域交流研究センター長（当時）とで相談・打ち合わせをおこない、「地域のボランティアニーズと本学学生を引き合わせるシステム」の構築を目指すこととなった。ただし、福祉系の学部・学科を持たない本学では、授業とタイアップした取り組みは難しく、「大学ボランティアセンター」の設置はさらに難しい。そこで、学内にいる学生ボランティアサークルを土台として、緩やかな「連絡協議会」的な会合を持つところから始めることになった。相談過程で重視し、両者で共有した「原則」は、

- ①ボランティアはあくまで自発的なものでなければならず、大学やセンターが押し付けるものではない。

- ②それぞれのサークルの個性や独自性を最大限に尊重し、新たな負担をかけない。
- ③活動の蓄積のある既存サークルこそが新しい取り組みの中核である。

といった事項であった。本事業の発展的継続にあたっては、常にこれらの「原則」に立ち戻りつつ、取り組みを見直していくことが肝要であろう。

こうして、社会福祉協議会（森嶋氏）からの呼びかけと日程調整を経て、平成 20 年 6 月から会合をスタートさせることができた。主軸となるサークルは「つくしの会」、「Σソサエティ」「つる子どもまつり事務局」の 3 団体であり、平成 21 年度からは、学内の「Work—Waku 都留」も主軸サークルの一つとして参加した。さらに、平成 23 年度からは I K I（いこいのひろば支援サークル）が加わった。会合の内容は、前回の会合以降の各団体からの活動報告、社会福祉協議会からのボランティアニーズの情報提供、各団体からの協力呼びかけや新事業の提案、また、時には市民の方からの直接のボランティア募集の告知などが中心である。社会福祉協議会にとっては、とりわけ大学生対象のボランティアニーズを持ち込む「窓口」ができたことが大きく、サークル各団体にとっては、地域のボランティアニーズを周知できること、相互の活動に触れて刺激を受け合えること、これらを通じて各団体の活動が活性化されることが大きい。また、会合の名称については学生たちの発案に委ね、最終的に「文大ボランティアひろば～だれでもどうぞ～」(略称：ぼらひろ)と命名された。この名称は、各サークルには所属していない個人としての学生や、一般の住民の参加も歓迎するという意味合いも持っている。

さて、「ぼらひろ」は発足以来、基本的には第 4 水曜日の午後 6 時 15 分から 4 号館 2 階会議室にて開催されることとなったが、回数を重ねるにつれて、各サークルの活動を超えて、参加サークルや個人が協働しておこなう活動への期待も高まり、先ず「ペットボトルのキャップを集めて世界の子どもたちにワクチンを届ける」活動に取り組むことから始めた。学内の 5 カ所に回収ボックスを設置し、各サークルが当番で回収し、毎月、都留市社会福祉協議会に届けている。さらに、ボランティアひろばでは、新しい取り組みを始める際には、その都度、新しいプロジェクトチームを立ち上げて対応することにした。こうした中から、平成 21 年度には「障がいのある方々の余暇活動支援」について新たな取り組みが開始され、同時に、ここに参加する学生もこれまでのような部活動やサークル活動に属さない個人参加学生も迎え、定例会には毎回 20 名を越す学生・社会人が参加するようになり、徐々にではあるが、学生たちの間に着実に浸透しつつあることを実感できるようになった。学生と社会人とをつなぐ調整役として地域交流研究センター職員も出席している。本年度も 8 月と 2 月を除く月 1 回の月例会を 10 回開催した。

2. 「いこいのひろば」の誕生

ボランティアひろばでは、社会福祉協議会や市内の組織・団体を通して募集される、学生ボランティアの要請に対して、積極的に多種多様な活動に参加してきたが、以前から、そのボランティア活動に参加している、市内の授産園「みとおし」で働く人たちとの交流の中から、

日常的に、障がいのある方々への支援が、何かできないだろうかという声により、平成 21 年 5 月に「ここに集うメンバーで、とにかく何か一緒に始めてみよう！」という新たな目標が掲げられた。そして、当初から中心メンバーの一人として参加している、授産園「みとおし」の佐藤保成さんから提案されていた、「障がいのある方々への余暇活動支援」の実現のための取り組みを行うことにした。「文大ボランティアひろば」の交流から派生したプロジェクトとして位置付けることにより、関心のある人たちが気軽に参加できる場として、その名称も『いこいのひろば』と名付けた。「障がいの有無に関係なく、地域に住む人たちがみんなが楽しく充実して過ごせる地域」を目指し、学生だけではなく、地域に住む方々と共に、1 ヶ月に 1 度イベントや企画を定期的に行うことを目的としたプロジェクトである。そこで、障がいのある人たちとその身近にいる人たちの声をじっくり聞こうということで、この新しい活動は平成 21 年 7 月 1 日に始まり、2 回の試行活動後、平成 22 年 10 月から正式に「いこいのひろば」の活動が開始された。

この活動は基本的に毎月 1 回開くことを目標に、活動母体となる体制づくりから始めることにした。先ず、活動指針となる企画書の作成であるが、先進組織としている、東京都渋谷区恵比寿にある、知的障害者恵比寿教室「えびす青年教室」で作成した企画書を参考とさせて頂いた。この、「えびす青年教室」は、渋谷区教育委員会が、主に知的障がいのある方々の社会教育活動の支援並びに、社会的ハンディキャップを背負った社会参加の一環を助成するため、障がい者ボランティアが一緒になって活動できる場・プログラムを提供することにより、障がい者とボランティアの人的成長、相互理解・信頼関係の構築等を図ることを目的として、原則として毎月 1 回支援プログラムを開催し、積極的に活動している場所である。

☆「いこいのひろば」企画書（一部抜粋）

(1) 事業目的

障がいの有無に関係なく、地域に住む人たち全員が楽しく充実して過ごせる地域づくりを目的とする。

(2) 主催者

いこいのひろば実行委員会

(3) 対象者

知的障がいのある人で、都留市保健福祉センター「いきいきプラザ都留」まで通うことのできる 18 歳以上の人。および、こうした活動に関心のある人。

※原則として登録者が活動に参加できることとする。

※知的障がいのある人で、18 歳以上の人のことを「参加者」と呼ぶ。

※参加費を毎回 100 円程度集金する（プログラム内容によっては追加料金）。

(4) 開催場所・回数・時間

○原則として都留市保健福祉センター「いきいきプラザ都留」で行い、プログラム内容によって館外で活動することもある。

○原則として毎月 1 回、第 3 日曜日、年間 10 回（8 月・2 月休み）。

○開催時間

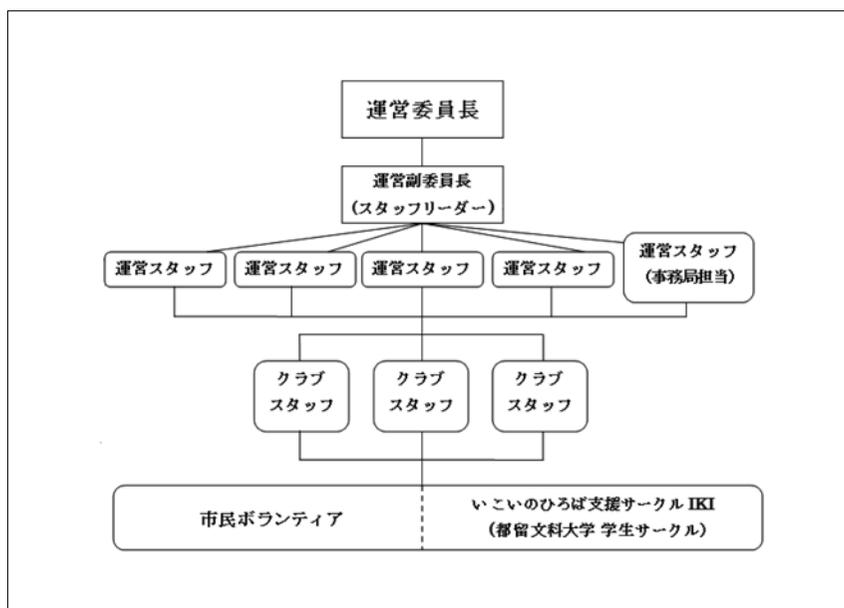
参加者：午前9時45分～午後3時30分

スタッフ、ボランティア：午前9時00分～午後5時00分まで（事前準備、反省会含む）

(5) 運営体制・組織図

本事業の目的を達成するために、参加者の要望をふまえたプログラムを安全かつ丁寧に実施していく必要がある。そのために、障がい者生活支援の経験のある方に組織に入ってもらい、スタッフ、ボランティアの勉強会も適宜行っていく。プログラムの企画・運営はスタッフとボランティア中心で行うが、希望やプログラムに応じて参加者も参加する運営体制をとっていく。また、ボランティアは、人数把握や個人情報保護の観点から参加者と同様に登録制にする。

【組織図】



平成22年10月10日に第1回目の「いこいのひろば」がスタートし、以来、年間10回のプログラム開催を継続し、平成25年度3月には通算34回の「いこいのひろば」を開催した。

毎回の月次プログラムの実施に向けては、各回の担当者が中心となり、3回の打ち合わせ会を開き、入念な打ち合わせを実施する。1回目は主にプログラム内容について、2回目は、「いこい通信」の発送、3回目は、参加者の把握、当日のプログラムに合わせた役割、日程確認、準備すべきもの等について打ち合わせを行い、当日に向けての準備を行っている。

このような活動の継続的な実施に向けて、地域交流研究センターからも都留市社会福祉協議会に対して開催に伴う消耗品等の購入に係る費用の一部負担として負担金という形で予算化して拠出している。

(文責・杉本光司)

Ⅳ－４．まちづくり交流センター

1. 設置について

2013年3月28日に締結された「都留市まちづくり交流センターにおける連携及び協働に関する協定書」に基づき、2013年4月から、都留市まちづくり交流センター（旧都留市文化会館・通称 YLO 会館）内、1階事務室に公立大学法人都留文科大学地域交流研究センターサテライトが設置されました。

2. 相談業務

学生や市民からの大学への相談を受け、今年度は図工・美術教室の宝保育所での図工教室の実現、学生ボランティア募集への対応、学生のイベント開催の支援などを行ないました。

3. 広報業務

地域交流研究センターや大学のイベントなどの情報やポスターを壁に掲示しました。また、地域交流センター通信、フィールド・ノート、大学案内を館内のラックに入れ、配布しました。

4. 暮らしに役立つみんなの広場

2014年度からは都留市まちづくり交流センターの事業となる暮らしに役立つみんなの広場を2013年9月からはじめました。

目的は、乳幼児の親子ばかりに利用されがちな交流室（旧老人福祉センター）にそれ以外の世代の方に利用していただくこと。さまざまな世代の交流の場の実現のため、都留市まちづくり交流センターにかかわる、都留市教育委員会学びのまちづくり課中央公民館、都留市まちづくり市民活動支援センター、都留市社会福祉協議会、地域交流研究センターが中心となり、都留市立中央図書館、谷村地区ボランティアコーディネーターの協力を得て開催しました。

9月から2014年3月までの約半年の間に20回開催し、1回あたり、平均17人の参加をいただきました。

また、9月と2月には学生に協力を依頼し、開催しました。

5. 2014年度の展望

暮らしに役立つみんなの広場の開催と学生への施設利用促進、学生の相談への対応、市民からの依頼・相談への対応の継続をします。

（文責・本田祐士）

IV-5. 文大名画座

文大名画座は、本学教員を広く市民の皆様を紹介するとともに、教員がおおすすめの映画を上映し、そのエピソードなどを語ったり、解説をすることを内容として、平成18年度から地域貢献活動の一環として実施しています。平成25年度は次のとおり開催いたしました。

日時：平成26年1月22日(水) 午後6時30分

場所：2号館2101教室

担当教員：社会学科 平林祐子 教授

映画タイトル：「100,000年後の安全」

本作品は、誰にも保障できない10万年後の安全。放射性廃棄物の埋蔵をめぐって未来の地球の安全を問いかける話題のドキュメンタリー映画で、我が国における福島の原子力発電所における放射能漏れによる被害の現状をきっかけに起こった「原発0運動」にも大きな影響をもたらした映画です。

映画概要：毎日、世界中のいたるところで原子力発電所から出される大量の高レベル放射性廃棄物が暫定的な集積所に蓄えられている。その集積所は自然災害、人災、および社会的変化の影響を受けやすいため、地層処分という方法が発案された。フィンランドのオルキオトでは世界初の高レベル放射性廃棄物の永久地層処分場の建設が決定し、固い岩を削って作られる地下都市のようなその巨大システムは、10万年間保持されるように設計されるという。廃棄物が一定量に達すると施設は封鎖され、二度と開けられることはない。しかし、誰がそれを保障できるだろうか。10万年後、そこに暮らす人々に、危険性を確実に警告できる方法はあるだろうか。彼らはそれを私たちの時代の遺跡や墓、宝物が隠されている場所だと思ってしまうかもしれない。そもそも、未来の彼らは私たちの言語や記号を理解するのだろうか。

当日は冬の寒い日の夕方にも関わらず、学生や市民の方々を中心に50名程が鑑賞してくれました。寄せられた感想の中には、福島県から都留市に避難しているご家族の方からのことばもあり、私たちの身近におきている現実を実感することもでき、また、未来に向けたメッセージも含めた感想が多く寄せられました。それらの内の一部を紹介させていただきます。

- ・福島県から都留市に避難してきたので、今回の映画は非常にリアルに感じました。自分も3人の子どもがいますが、子どもや孫の世代に美しい地球を残すために今の大人が頑張らなければならないと思いました。(40代・男性)

100,000年後の安全

誰にも保障できない10万年後の安全。
放射性廃棄物の埋蔵をめぐって未来の地球の安全を問いかける話題のドキュメンタリー。



毎日、世界中のいたるところで原子力発電所から出される大量の高レベル放射性廃棄物が暫定的な集積所に蓄えられている。その集積所は自然災害、人災、および社会的変化の影響を受けやすいため、地層処分という方法が発案された。フィンランドのオルキオトでは世界初の高レベル放射性廃棄物の永久地層処分場の建設が決定し、固い岩を削って作られる地下都市のようなその巨大システムは、10万年間保持されるように設計されるという。廃棄物が一定量に達すると施設は封鎖され、二度と開けられることはない。しかし、誰がそれを保障できるだろうか。10万年後、そこに暮らす人々に、危険性を確実に警告できる方法はあるだろうか。彼らはそれを私たちの時代の遺跡や墓、宝物が隠されている場所だと思ってしまうかもしれない。そもそも、未来の彼らは私たちの言語や記号を理解するのだろうか。(以下HP: <http://www.uohk.or.jp/100000/>)より)

上映作品：『100,000年後の安全』(100まんごんのあんげん)
目 録：1月22日(水) 18時(1回) 18時30分(2回)
場 所：社会学科 2号館 2101教室(定員200名)
観覧料：学生・教員 無料、一般 500円(1回)～2000円(3回)まで
入 場 料：無料(事前に予約が必要です)
申込方法：社会学科ホームページから申込みまたは申込書にお名前、お名前、年齢、電話番号をお知らせください。当日券も可ですが、お申し込み多数の場合はお申し込み優先となります。申込みの都合でお名前が合わない場合はお問い合わせください。
解説教員：平林 祐子(社会学科教授)
社会学科が専門分野の本学教員が、上映前に短時間の解説を行います。
お問い合わせ先：社会学科 学生課 地域交流研究センター
TEL 4341 4341(内線444)
電話受付時間：平日 9:00～17:00(日・祭日を除く)となっております。

- ・自分達が簡単にスイッチ1つで使っているものの重さを再認識することが出来ました。処理できないものを増やすのではなく、なくすことが必要だととても強く感じています。私たちの地球のために、自分のできることから少しずつしていきたい。(30代・女性)
- ・放射能の問題になると、どんな意見も無責任でいい加減なものに聞こえる。それは、放射線というものが人間の力を逸脱しているからのように思える。10万年規模の問題だと気づいた時点で放射能を使うことをやめるべきだったと思う。もう引き返せないが、このまま進めばより深刻な問題になってしまうと感じた。(20代・学生)
- ・以前上映(都内で)されていたときに見たいと思っていたので、名画座で取り上げてもらえて助かりました。平林先生の「反原発であっても、すでに廃棄物は多くあり処分を考えなくてはいけない」という言葉が印象に残りました。今日の英字新聞には、日本では宮城県の3か所が候補になっているという記事がありましたが、どんな基準で進んでいるのでしょうか…。(女性)

なお、「地域交流センター通信 25号」の24ページでは、「地域・故郷を思うー東日本大震災と私たちー(その6)」として都留市民の60代の方の感想を掲載させて頂いております。

(文責・杉本光司)

IV-6. 学級づくりの向上をめざす実践講座

表記の講座については、平成24年度に引き続き、主催する「都留ことばの会：代表 鶴田清司」との共催講座として、山梨県内の小中学校や教育機関へのポスター作成配布やホームページへの掲載等を中心とした広報活動にも積極的に関わり盛大な講座開催に貢献しました。

【講座趣旨】

学級づくりは教育の原点と言われています。学力の保障はもちろん、民主的な人間関係づくりや豊かな教室文化の創造の基盤となるのが〈学級〉です。

しかし、その重要性が叫ばれるわりには、具体的な学級づくりの方法については学ぶ機会が少ないというのが実情です。また、学校では教員構成の関係で、ベテランの先生方の実践知が若い先生方に十分に伝わらないという問題もあるようです。

今年も昨年に引き続いて、県内の学級づくりの達人を講師に招いて、8回にわたる講座を企画しました。

対 象：山梨県内の教員、都留文科大学学生、他

会 場：都留文科大学3号館3202教室

時 間：土曜日午後6時～8時

講 師：梶原 齊(富士河口湖町立勝山中学校教諭)

金勝武鑑(富士学苑中学校講師)

清水浩喜(都留市立東桂小学校教諭)

白井明彦(山梨市立後屋敷小学校校長)

杉本賢二（富士東部教育事務所指導主事）
 三浦明仁（富士吉田市立富士小学校教諭）
 渡辺恭子（富士吉田市立下吉田中学校教諭）
 渡辺 正（笛吹市立石和中学校教諭）

	開催日	講師	講義内容（予定）
1	5/25（土）	三浦 明仁	高学年で集団の自治を学ぶ学級・学年づくり
2	6/22（土）	渡辺 正	子どもとつながる言葉、子どもをつなげるかかわり
3	7/27（土）	梶原 斉	いい学級づくりは学校づくりを視野に入れて！
4	9/28（土）	金勝 武鑑	教師の根っこになるものを探しながら
5	10/26（土）	渡辺 恭子	文化性の高まりから本来の規範意識を育む！
6	11/23（土）	白井 明彦	学級づくりから学校、地域づくりへ 一つなぐ発想を生かして
7	1/25（土）	杉本 賢二	Q-Uを生かして学習と生活の基礎集団をつくる
8	2/22（土）	清水 浩喜	全ての子どもの可能性を信じ、成長し合う学級づくり

実施回数：7回（8回計画し内1回（2/22）は大雪のため中止）

参加人数：103名（各回平均 約14名）

参加者の感想：

- ・教育実習で子どもとの距離の取り方に悩んだ。この講座で解決の糸口が見えた。（大学4年生）
- ・子ども一人一人が自分の価値に気づけるように、子どもをよく見てそれを伝えていくことが大切だと実感した。（小学校教諭5年目）
- ・失敗したことも楽しそうに話していて新しい活力をもらえてよかった。（中学校教諭7年目）
- ・高校の現場では学級づくりを学ぶ場はない。オープンな会なので参加しやすくありがたい。（高校教諭14年目）

今後の方向：

- ・参加者の声に応え、いじめ・不登校・保護者対応など、現実で悩んでいることへの提起をしたい。
- ・県内全域に数回にわたって告知できる方法を考えたい。
- ・講師を広くさがしてよりよい講座にしたい。

（文責・鶴田清司）

V．地域交流研究教育プロジェクト

V－1．田んぼクラブ ー稲作体験実習の取り組みー

プロジェクトメンバー

- ・西本勝美（代表：本学初等教育学科）
- ・畑 潤（本学社会学科）

1. 本活動の経過と活動概要について

「田んぼクラブ」は、2005年度から、都留市職員の勧誘・仲介を受けて、都留市農業委員会および山梨県富士・東部農務事務所の協力のもとに始まった活動で、以来、本学近くの水田（約6畝）で学生と教員の有志が稲作に取り組んでいる活動である。当初の2005年度～2007年度の3年間は農務事務所のはからいで山梨県の「ふるさと水と土基金」の助成を受け、続く2008年度・2009年度の2年間は「環境教育G P」の一環に位置付けられ、活動が大いに発展した。そして、2010年度からは、本学の「環境E S Dプログラム」との関連（実習系への位置づけ）もあり、本学地域交流研究センターの「地域交流研究教育プロジェクト」に申請し採択されている。今年度（2013年度）は、プロジェクトとしての第2期1年目（通算4年目）であった。

2008年度以降は農業委員会から自立し、「基本的にはすべての作業を自分たちでやる」ことを目標として、それまで市役所の農業リーダーや農業委員会に一任していた種籾の消毒・催芽^{さいが}といったところから、播種^{はしゆ}、田植え準備、水入れ、田植え、除草、稲刈り、はざ掛けは もちろん、夏季休業中の水見も曜日毎の当番制でやり切っている（代掻き、秋起こしのトラクター作業と、脱穀・精米はJ A等に依託）。田植え以後の無農薬栽培と、有機質肥料の使用によるぎりぎりの低農薬米への挑戦も一つの目的としている。

2010年度からは「学生主体」の運営が目指され、ほとんどの作業を学生のリーダーシップで進めることができるようになってきている。

2. 今年度（2013年度）の活動について

プロジェクト4年目となる今年度（2013年度）の活動であるが、学生主体の農業系サークルとしての運営が定着し、学生組織としては、二代目の学生リーダーが、昨年度に引き続き代表を務めることになった。

活動の大きな特徴としては、一昨年度、昨年度に引き続き、「水苗代」と「一本植え」に取り組んだことが挙げられる。これは一昨年度当初に、学生の中心メンバーからの発案がきっかけとなり、学生数名で長野県の農家に研修に行き、ノウハウを教わったうえでの取り組みである。

「水苗代」は、田の一角に周囲を堀で囲った床をつくり、直に種籾をまいて苗を育てる育苗法で、農村でもほとんど見られなくなった古い方法であるが、これに取り組むことで米づくりの全行程をクリアし、発芽や苗の生長のようす、稲の旺盛な生命力を実感することができ



る。今年度は、この水苗代の改良型として、木枠とブルーシートで浅いプールを作り、その中に播種した育苗箱を並べる方法を試みた。これは育苗中の雑草対策と、水管理の合理化のための改良であったが、水の不足や温度の過上昇が一気に致命的なダメージとなることや、プール内の水質が悪くなることなど、思いがけない困難も生じ、土（自然）と切り離れた環境で苗を育てる難しさを痛感することにもなった（土とつながっていれば、さまざまな変化が緩衝される）。

また、今年度の新たな取り組みとして、学生が仕入れてきた都留市産の「黒米」を、従来のうるち米に加えて、田んぼの一部に植えることができた。数年前から「黒米をやってみたい」という希望が出ていたが、教員の手をまったく介さず、学生たちの人脈と行動力によって実現できたことは評価に値する。

田植えは、通常の手植えの場合よりもさらに大きく育てた苗を、縦・横 30cm 間隔（尺植え）で 1 本だけ植える「疎植一本植え」という方法でおこなった。稲は 1 本だけ植えても根元から分けつして 20～30 本に増える。通常の植え方（3～5 本くらいを一個所に植える）ではわかりにくい、「一本植え」では 1 本が 20 本に、また「一粒が千粒」になると言われている稲の生態をはっきりとつかむことができる（一昨年の収穫時に実際に数えて「一粒が千粒以上」になることを確かめた）。これらの取り組みは、米づくりの工夫を知るといっても、稲という作物を深く知るといっても大きな成果を挙げている。

また、昨年度と同様に、今年度も除草が徹底しておこなわれた。田植えの 2 週間後から出穂期まで数回、学生たちの主体的な除草作業が徹底しておこなわれたため、数年前まで悩まされていたノビエの大発生をほぼ押さえ込むまでになった（代わって目立ってきたのはコナギであるが、この雑草は除草剤をまかない水田に限って発生するとのことで、活動当初からの無農薬栽培の成果の現れでもある）。無農薬栽培のため、手押し式の除草機も併用しているが、除草作業は炎天下の重労働である。この労苦の多い作業を学生主体でやりきったことは、継続して関わりを持つ学生たちのなかに「自分たちの田んぼ」「自分たちの稲」という意識が芽生えてきたことを意味する。これは「農」という営みの本質に触れる部分であり、これまでの活動の蓄積・成果として高く評価できる。

今年度の収穫米（うるち米）は、量・質とも上出来で、とりわけ食味の点では過去最高の出来であった。学生たちの意識と技量の高まりが、はっきりと結果に現れたと言えよう。

なお、昨年度から本学の「環境 E S D



プログラム」の「実習系」活動の履修（2年次）が開始され、「田んぼクラブ」は同プログラムの「ナチュラルライフコース」の選択履修対象に位置づけられているが、昨年度の1名に続き、今年度も1名に45時間の実習を認定した。

3. 来年度（2014）年度の活動に向けて

リーダー的な学生の継承、新規メンバー募集などの課題は恒常的な課題であるが、活動開始から通算10回目の2014年度の活動は、三代目となる新学生リーダーが代表を務め、副代表を2名置く形態でスタートした。「プール苗代（改良型水苗代）」と「一本植え」を継続し、さらに田んぼの一部で「黒米」の栽培を継続することになったが、播種の時期が例年に比べて2週間以上遅くなったことも一因となって、当初から困難続きのスタートとなっている。課題は多いが、学生たちに蓄積された力量と人脈によって、一つひとつ克服しながら活動を進めている。

（文責・西本勝美）

V-2. 食育つる推進市民会議活動

—市民会議と大学の連携による学生主体の食育実践活動の試み—

初等教育学科 生活環境科学系

吉住 典子

平 和香子

<プロジェクトの概要>

都留市では、「第5次都留市長期総合計画」に掲げる「健康ではつらつと暮らせるまちづくり」の実現に向け、市民一人ひとりが自ら考え主体的に健康によい食生活を営めるような環境づくりを図ることを目標としている。

その具体的活動として、平成19年3月に「食育つる推進プラン」を策定するとともに、効果的な計画の推進と推進活動の充実を図るため「食育つる推進市民会議」を設置し、食育を推進する各主体の情報共有と協働により、様々な取り組みを実施している。

また、平成25年度からは、前プランに引き続き「新食育つる推進プラン」（～平成27年度）を策定し、内容の継承及び更なる推進を図っている。この新プラン活動開始時に、市民会議に生活環境科学研究室の学生も共に参画が可能となり、食育に関する現場での学びの機会を得る貴重なチャンスとなっている。

<目的>

①学生が、都留市における食育の現状やあり方、また保育や学校現場における食育教育につ

いて学んだ上で、様々な現場での活動や実習を通して、将来教員になる上での食育実践力や連携力を培う。

- ②学生が、市民一人ひとりが生涯を通じて健やかに暮らすことができるよう、健全な食生活の実現、食文化の継承、健康の確保等についてどうしたら良いか考え、市民参加型の取り組みに移す実践計画から運営までを主体的に検討する。
- ③学生が、自らの「食」について考える習慣、「食」に関する様々な知識、「食」を選択する判断力、「食」を調理加工する実践力を身につける。
- ④学生が、世代を超えた市民の皆様との交流の中で、コミュニケーション力を高め、高齢者の方々や乳幼児との接し方について学ぶ。

<平成 25 年度の報告>

平成 25 年度は学生と共に参加する初年度として、年 3 回（7 月、12 月、3 月）開催される「食育つる市民会議」の中で、学生が参画するにはどのような方向性が望まれるか、どういった協力を得られるか等について計画案及び実施準備を行った。

●第 1 回全体会議（平成 25 年 7 月 23 日・至都留市役所）

- ・食育つる推進市民会議実施計画案における重点目標に即し、以下の 5 点を学生が行う事例案として提案した。

①重点目標Ⅰ 朝食の欠食をなくしましょう

（事例案）・大学朝食提供サービス

②重点目標Ⅱ 食事は楽しく取りましょう

（事例案）・幼保小連携を視野に入れた市内教育機関への栄養教育出前授業

③重点目標Ⅲ 生活習慣病の予防に努めましょう

（事例案）・高齢男性のための料理教室

④重点目標Ⅳ 正しい食の意識を身につけましょう

（事例案）・味覚教育、家庭教育講座の実施

⑤重点目標Ⅴ 食文化をつなごう

（事例案）・特産品を用いた調理実習教室及び小冊子（レシピ本）の作成と活用

- ・都留産アオハタ大豆を用いた豆腐の味噌漬けの食味アンケートの実施

●第 2 回全体会議（平成 25 年 12 月 17 日・至都留市役所）

- ・前回提示させていただいた大学としての取り組みに関し、大いに関心を寄せていただいた。特に②に関しては、食育に関する幼保小連携がうまくいっていないことが平成 24 年度ワークショップから現場の先生方から挙げられているため、効果があると期待される。また、③に関しては、高齢男性のみでなく世代を超えた（孫と祖父母等）調理実習の提案が行われ平成 27 年度実施に向け、学生が計画案を次回提出予定である。

→学生が実際に幼稚園や保育園、小学校等に出向いてパネルシアターや大型絵本、つるビーを用いた劇等を通じた食育実践を行う機会を持ち、離乳期～幼児期～学童期における一貫した食教育を行い、連携システムにつながるきっかけ作りを行う。

※平成25年度は、予算をこのための食育啓発用物品の購入（食育パネル、食育エプロン、大型絵本、紙芝居、子ども用包丁セット等）に当てさせていただいた。

●第3回全体会議（平成26年3月19日・至ミュージアム都留）

学生からの提案

- ・家庭を巻き込んだ食育（祖父母・親・子世代が共に学ぶ食育実習）
- ・肥満と痩せのケアに重点を置いた食育活動（小学生対象・パネルシアター）
- ・大学発の特産品としてアオハタ大豆の豆腐の味噌漬けの製品化

都留市の主任栄養士や学校栄養教諭、幼稚園や保育所の代表の方々をはじめ、食育の専門の方々が多く出席する会議の中で、自分たちの考えを理解してもらい、協力してもらえそうなことが分かり、学生たちはとても嬉しく感じ、やる気になっている。

今年度は、会議で学んだことを持ち帰り、ゼミ生が中心となり、以下のような取り組みを行った。

- ・調理が苦手な人でも簡単に作れる栄養価の高いレシピの作成・実践（高齢者や子どもでもできる料理）
- ・子どもが自分で作れる栄養バランスが良いお弁当レシピ（食育の視点から）
- ・いつか親になる若者に向けて、子どもの発達と栄養（離乳食を実際に作ってみよう・市販の粉ミルクを飲んでみよう）
- ・パネルシアター、食育劇の練習（幼保小連携）
- ・オリジナル大型絵本作成（幼保小連携）

来年度も引き続き、食育委員の方々や地域、学校関係の皆様から沢山のことを学ばせていただきながら、食育に関して学びを深め、都留市の食育活動に貢献できたらと考えている。

（文責・平 和香子）

V-3. 「谷ニラボ」活動について

申請代表者：初等教育学科 山森美穂

テーマ：谷^やニラボ ～小学校教員志望学生の科学実験に関する実力向上と小学生の科学への興味喚起の機会としての放課後実験教室～

【目的】①小学校教員をめざす学生が指導的立場で小学生とともに実験をする経験を積むこ

と、②学生が実験内容の選定から安全な実験教室の運営までを行う経験を積むこと、③学生の自然科学の素養を高めること、④理科実験教室への参加が子どもの理科への興味を高める効果を検討することである。

【概要】 谷村第二小学校で放課後に小学生を対象とした理科実験教室（通称「谷ニラボ」）を平成23年度からはじめた。実験教室の内容選定や準備、当日の進行は学生が中心になって行い、上記目的①～③の達成を目指す。参加した小学生を対象に、アンケートやインタビューを行い、理科実験教室への継続的参加が子どもの理科への興味を高める効果を検討する（目的④）。同時に、指導的立場で参加した学生に対する効果も検討する。

【平成25年度の報告】

谷村第二小学校で、放課後と夏休みに小学生を対象とした理科実験教室を行った。

第1回：8月1日 「ひんやりする実験」

対象：1～6年生、参加者：小学生39名、大学生6名

第2回：8月5日 「充電池をみんなで作ってみよう」

対象：3～6年生、参加者：小学生10名、大学生3名

第3回：11月13日 「すきまをとおる水」

対象：1～6年生、参加者：小学生30名、大学生7名

第4回：11月25日 「花に色水を吸わせてみよう」

対象：1～6年生、参加者：小学生25名、大学生3名



どの回も参加者の反応はよかったが、なかでも「ひんやりする実験」が好評であった。ヒヤロンなどの商品名で市販されている瞬間冷却パックの原理に関する実験など、吸熱反応を扱った内容であった。

低学年の参加者数が多い傾向があり、高学年の参加者は、ほぼ固定メンバーである。対象を3年生以上とした充電池の実験は少人数の参加者だったが、大学生と密に関わって実験をすることができた。

大学生に対する効果として、谷ニラボに積極的に参加した卒業生が勤務先の小学校で理科実験クラブの顧問をしているという連絡があった。

（文責・山森美穂）

(付) 2013 (H25) 年度 地域交流研究センター担当教職員

杉本 光司	情報センター教授	地域交流研究センター長 地域情報教育担当
佐藤 隆	初等教育学科教授	地域交流研究センター次長・ 発達援助部門担当
畑 潤	社会学科教授	地域交流センター通信編集長 フィールド・ミュージアム部門担当
坂田有紀子	初等教育学科教授	フィールド・ミュージアム部門担当
鳥原 正敏	初等教育学科教授	地域美術教育担当 フィールド・ミュージアム部門担当
品田 笑子	センター特任教授	地域教育相談室担当
北垣 憲仁	センター特任教授	フィールド・ミュージアム部門担当
久保田 浩	学生課長補佐	地域交流研究センター事務局
小林 幸恵	センター担当事務職員	地域交流研究センター事務局
本田 祐士	サテライト担当事務職員	地域交流研究センター事務局

2013 (H25) 年度 地域交流研究センター運営委員

鳥原 正敏	広報委員長		
西本 勝美	初等教育学科	坂田 有紀子	初等教育学科
野口 哲也	国文学科	稲垣 孝博	英文学科
畑 潤	社会学科	大辻 千恵子	比較文化学科
小林 正人	学生課長	鬢 櫛 美咲	総務企画担当
池谷 廻久	市民代表 (都留市まちづくり支援センター長)		

2014年9月19日 発行

編集者 都留文科大学地域交流研究センター

発行者 都留文科大学
〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1
電話 0554-43-4341

印刷所 有限会社 印刷エトリ
〒402-0052 山梨県都留市中央 2-7-24
電話 0554-43-3451
